

周 劍 雲

——一九二〇年代初期の上海知識人——

小 野 信 爾

はじめに

一 社会教育と新劇

二 実業救国・教育救国

三 『解放画報』と婦女解放

四 「時代に服務せよ」

む す び

注 録

はじめに

五四運動のなか、五月二一日に結成された上海学生聯合會には、多くの中等学校の教員が職員（役員）として運営の中枢に参加していた。かれらを所属学校の学生代表として認めていたからである。⁽¹⁾ 確認できる者だけでも、裴国雄（寰球中国学生会学校）費公侠（同）顧肯夫（東吳二中）任矜蘋（民生女学）潘公展（市北公学）翁国勳（滬北公学）がおり、裴国雄は評議部書記に、翁国勳は交際部書記に選出されている。その他でも中学校・女学校から職員に推された者の、かなりの部分が教員だったのではないかと思われる。しかも、かれらは運動のなかで重要な役割を果たした。潘公展はさらに上海学生聯合會を代表して全国学生聯合會の評議部に加わり、『学生聯合會日刊』の総編輯を務め、⁽²⁾ 裴国雄は一九一九年一〇月の第三次請願に上海学聯を代表して北上した（もつともかれは請願を無意義とする北京学聯の主張に共鳴して、請願団から勝手に離脱してしまったが）。⁽³⁾

職員として学聯で活動したのは教員ばかりではなかったようだ。若手の演劇評論家であり、出版社・新民図書館の編輯主任であった周劍雲も、どういう名目の下では判らぬが、その一員だった。⁽⁴⁾ 罷市の始まった六月五日、彼は学生聯合會代表とともに各劇場を回り、演劇の上演停止「停鑼」を訴えるなどの活動を見せていた。⁽⁵⁾ 社会的経験の豊かなければ青年知識人の参加は学生たちにとって有力な支援であったに違いない。一九一九年九月、学聯の方針が変わり、教員は各校分会を代表できなくなったが、激動の数ヶ月を共に闘ったかれらは、民生女学の教務長任矜蘋などの発起で上海学生聯合會初年度「第一年」職員会をつくり、旧職員の結束を保ちながら、学生運動のバックアップを続けたのである。⁽⁶⁾

教員・ジャーナリストなど知識人は商界の運動でも活躍した。紹興旅滬同郷会の代表として商業公団聯合會評議員であった澄衷中学校長曹慕管は、罷市のなかで終始強硬論を主張し、当局から「激烈分子」をもって目された。⁽⁷⁾ 罷市に参加した商人たちは「貴族的官僚的」な総商會に抗議し、商界聯合會などの名目で自らの組織を持つとするが、開市直後から「平民商會」設立の大きなうねりが起こり、一〇月二六日、二三路の商界聯合會を結集して上海各路商界総聯合會の成立を見るにいたる。その動きのなかで知識人が具体的にどういう役割を果たしたかは分明的でない。しかし、周劍雲・鄭鶴鵠（後出）が山東路商界聯合會の職員に選ばれ、鄭正秋（後出）が広西路聯合會の交際委員を務め、任矜蘋が漢口路聯合會の文牘部委員を引き受け、邵力子（民国日報社）が河南路聯合會の評議長に選ばれたことを見ても、商界の結集に少なからざる貢献のあったことは疑いない。⁽⁸⁾

罷市で活躍した店員たちも組織を持つとした。いくつかの流れが合流し、一九二〇年の双十節を期して上海工商友誼會が結成されるが、周劍雲・鄭鶴鵠・谷劍塵（後出）・費公侠らがその設立を支援し、職員として初期の運営にも参加した。周劍雲などは規約改正の中心となり、いったんは評議會議長に選出され、「身、数職を兼ねるに因り」、この要職は果たし難いと固辞し、平の評議員で留まることをやると許されたほどであった。⁽⁹⁾ 任矜蘋は一九一九年一月、五四運動で生まれた大衆組織・中華救国十人団聯合會に加入し、まもなく副会長に選任されて指導的な部署に就いたが、二〇年秋から二一年にかけて十人団運動の再建が課題となると、翁国勳・孫道勝（キリスト教青年會商業夜学国民義務学校、かれも学聯の旧職員であった）・唐豪（毓賢学校校

長）・鄭鶴鳴・周劍雲・鄭正秋・邵力子・包世傑（『益世報』記者）・沈卓吾（聯合通信社）なども相次いで加入し、内側から運動を支えた。⁽¹⁰⁾ ほぼ同じ時期、吳佩孚の提唱した国民会議に賛同して、団体加盟方式による国民大会策進会が上海で結成され、一時活発な動きを見せた。その評議会には周劍雲・鄭正秋・包世傑・唐豪・沈卓吾・曹慕管が、幹事会には鄭鶴鳴・孫道勝がそれぞれの所属団体から推されて加わり、積極的に活動していた。⁽¹¹⁾ 例は他にも挙げられるが省略しよう。要するに五四運動からその後の一時期、上海の進歩的・愛国的運動の最前線で、多少の出入はあるものの、一群の知識人が金太郎飴のように到るところで顔を出し、あえて指導的とまでは言わずとも、そうとうに重要な役割を果たしていた事実、当時の新聞を繰ってみれば一見して知れよう。

かれらのうちでは民国日報社にあって五四事件の報に接するや、ただちに母校・復旦大学に駆けつけ、学生に決起を促した邵力子（仲輝）が国民党系に属したのを除けば、全部が当時は無党派の活動家であった。かれらがそのころどのような思想を持って行動していたのか、これも邵力子を除けば、すべてマイナーな知識人として、それを探る手がかりに乏しいが、ほとんど唯一の例外が周劍雲である。かれは一九二〇年五月から二年六月にかけて、婦人解放を提唱した啓蒙雑誌『解放画報』一八期を主宰し、自身、評論・講演録・読者来信への回答など計八万五千字を越える文章でその主張を表白しているのである。当時のかれの思想を解明することは、何人かかれと形影あい伴うごとく活動していた知識人の思想の傾向を窺うことにもなるはずである。小論が五四運動前後から二〇年代初期の草の根的啓蒙運動のありように、諸賢の注意と関心を喚起する契機となれば幸いである。

一 社会教育と新劇

周劍雲は抗日戦争前、中国の映画界では有名人であった。それも俳優や監督としてではなく、当時最大の映画会社・明星影片股份有限公司の有能で見識ある経営者としてであった。したがって『中国電影家列伝』第一集（中国電影出版社 一九八二年）

にその伝を取めるが、明星創立前の経歴についてはわずかに六行。安徽合肥の人で一八九三年の生まれ、アメリカ人リード博士（G. Reid 李佳白）の尚賢堂および江南製造局兵工中学に学ぶが、父親の事業の失敗で学業を続けられず、社会人となって愛麗園すなわちかのハードウーン家・哈同花園の蔵書楼主任や新民図書館の編輯などを務めた、幼いころから旧劇を好み、後また新劇に熱中し、さらに当時の新聞・雑誌に散見するように小説や劇評なども書いていた、とあるだけである。五四当年の活動はもちろん、『解放画報』にすら言及しない。

五四以前のかれは社会教育の手段としての演劇・新劇と格闘していた。自認するところによれば、子供のころ大人について宮芝居「廟台戲」を見、役者の真似をしたのが始まりで、上海にきてから数々の悪習とは無縁ながら、芝居好きだけはいよいよ昂じた。一三、四歳のころからはプロ「科班」に劣らぬ熱心さで演劇を勉強したという。⁽¹⁾ 中国では素人の芝居役者を票友と称するが、二〇歳の時、一九一三年秋には票友仲間とついに新劇の劇団を結成するまでになった。

この年、かれは商務印書館の票友たちが農村などに赴いて無料で演劇を観せ、教育の普及に貢献しようとして発起した通俗新劇団に加わり、さらに同志を語らって一〇月、啓民新劇研究社（社長・総理孫玉声 すなわち鴛鴦胡蝶派の作家・海上漱石生）を足させた。当初の社員は「商学両界」の約三〇人、「清白なる品格、正当なる職業、普通の学識」を持つことがその資格で、稽古場「模範舞台」を持ち、每晚八時から一〇時まで稽古「練戯」のために集まった。経費は一人月一元の社費と後援者の賛助金で賄われ、運営は社の議事に当たる議事部と内閣に当たる幹事部によって民主的におこなわれる建前であった。⁽²⁾ まもなく社名から研究の二字を削って本格的な劇団活動を準備し、社員も六〇人に増えたが、内紛・派閥抗争もそれに応じて吹き出した。しかし、上げ潮の勢いで何回かの試験的公演を成功させ、一四年四月、元病院を改装した四百人収容の常打ち小屋でいよいよ旗揚げをした。そのさい舞台に立たせてもらえない社員二〇人ほどが退社したほか、役者として優れた力量を持ちながら、家庭の反対で出演できない者もあったというのは、票友の限界を示すものであつたろう。周劍雲はこの時から周江潮、後さらに周亜夫（言うまでもなく匈奴撃退・内乱平定に功を挙げた漢代の勇將の名）の芸名を用いて舞台に立ったが、老け役「莊嚴老生」、二枚目

「言情小生」がはまり役だったという。社内での地位も最初の議事部議員から議事部長・総董と進み、いよいよ重きを加えた。だが、興行不振の夏になると資本に乏しい啓民社はたちまち経済的な苦況に陥った。当時の新劇界の通弊であった役者の女出入りと不行跡に、創社の理念に基づいて周ら清議派が除名を要求するなど厳しい態度で迫ったことも内紛を激化させた。社長の孫玉声は金銭的損失と対立調停の失敗とで辞任し、退社する社員も多く出た。残った社員は二〇余人、正理事（社長を改称）に推された周劍雲を中心に、八月から再建を図ったが難航した。寧波・漢口などの劇場から招かれたものの、本職を別に持つ社員を抱えては社全体として応ずることができず、個人あるいはグループで出かけることで社の結束は弛み、動揺は収まらなかった。一九一五年八月、杭州の劇場から啓民社に呼びがかかった。周劍雲らは西湖の風光にも引かれて参加可能な社員を率い、春柳社の歐陽予倩らをも語らって出演したが、劇場の営業不振のため、一〇月、上海に帰らねばならなかった。啓民社の活動はここで終わる。最後まで周劍雲と行動をとにした者は一〇余人、その中には後年明星影片公司以活躍する鳳昔醉（倩影）、高漢飛（梨痕）などの名があった。

四〇余年後に歐陽予倩はこう書いている。⁽³⁾

啓民社の人が杭州で公演した時、新編の「征鴻淚」という芝居をやった。劇中、「救亡大会を開く」の一幕があり、学生孫次雲が長い長い演説をして、日本の侵略に抵抗するよう国民に訴えた。そのころの新劇ではこうした義憤に燃える演説はもう珍しかった。

この時、孫次雲に扮したのは他ならぬ周亜夫、すなわち周劍雲である。言うまでもなく日本の二一カ条要求に抗議し、かつ暗に袁世凱の帝政陰謀を批判した演説であったが、珍しがられたのは「言論派」を売り物にする役者がそのころはもう少なくなっていたからである。歐陽予倩のこの文章によれば、日本の新派劇に学んだ新劇（文明戯）は新派の前身であった壮士芝居と同様、政治的使命感を持って生まれた。かれもその一人であった留日学生の有志の演劇運動と上海の学校演劇に始まる洋風劇が合流するなかで、京劇・昆曲などの旧劇にない写實的舞台装置・背景と社会的・政治的・革命的題材とを売り物に、辛亥革命前後、そ

れは大いに人気を呼んだ。役者が観客に向つて演説をぶつ、大議論を展開するなどには当時はごくごく普通のことだったのである。しかし、第二革命失敗後、袁世凱政府の弾圧と進歩勢力の後退は新劇をも沈滞させた。観客に迎合する低俗的退廃的なものが主流となり、芸術至上主義路線の春柳社、社会教育路線の啓民社はい前後して解消せざるをえなかったのである。もっとも周劍雲もこんな芝居ばかりしていたのではない。杭州ではみずから求めて女形の歐陽予倩と純愛物の「神聖之愛」(歐陽予倩作)を共演したのだが、その演技力にたいする予倩の評価はさほど高くはなかつたようである。⁽⁴⁾

ところで孫次雲の演説を周劍雲は、その主編した『鞠部叢刊』(上海交通図書館 一九一八年一月)の最終章「品菊余話」の末尾に収録している。全文三三〇〇字にのぼる「周亜夫演征鴻淚救亡二幕之演説詞(飾孫次雲)」であるが、日本(文中では太陽国と呼ぶ)の侵略の野心を暴く一方で、民主立憲国の中国では「国家の主人翁」たる国民に国事を問う義務のあることを力説し、犠牲を恐れず奮起するよう呼びかけている。しかし、その日本批判には必ずしも正鵠を射ない点も少なくない。たとえば日本を「売淫国」と極めつけるくだりである。

かの国は産物はいへん少なく、人口も少ない国であります。生産するものはみないんちきな品物で、みてくれは良くても使ひ物にはなりません。始めはそれでも人を騙して売りつけますが、後には正体を見破られて儲けはだんだん減ってきます。そこで奴はわが国に好色の人が多いのに目をつけ、見目形みめかたちの良い女太陽人を選んで中国に送りこみ、売春をさせるのであります。彼女らが妊むとすぐに帰国させ、出産後にまた連れてきます。金を儲けたうえに子種までもらつて一挙兩得とはこのことであります。こんな淫賤な行爲は、他の者なら絶対にやりませんが、奴らだけは自分の利益になりさえすれば恥も外聞もないのであります。みなさんがそれを恥じ知らずだと罵つても、相手は笑つてあなたがたに言います、私は金になりさえすればいいのです、ご贖罪ごくわいいただいておおきに、と。みなさん、売淫国の三字を綽号として奴に贈るのはまちがつてますか。

周劍雲が本気でそう信じていたかどうかはともかく、少なくともこうした主張が大衆扇動に効果ありとしていたことは疑いな

い。当時の日本が公娼制度をもつ国であったこと、北はシベリアから南は東南アジアまでいたるところに日本人売春業者が進出しており、中国でも同様であったことは歴史的事実であり——演説のなかでかれは日本商品とともに日本人娼妓のボイコットをも訴えている——、売淫国との非難が完全に誤りだとはいえないが、同時にはなほだしい誇張と歪曲を伴っていることも明らかである。一九一五年時点でのかれの愛国主義のレベル、さらにはその民衆観の一端をここに窺うことができる。それを後節で紹介するかれの言動・主張のありようと対比するとき、五四運動の切り開いた地平の広さを検証する好個の手がかりがえられよう。

さて啓民社解散後の周劍雲は、ときおりチャリティー公演「義務戯」に客演するぐらいで、もっぱら演劇評論家として活躍し、前述のように一九一八年には、当代演劇総鑑といふべき『鞠部叢刊』二大冊を主編・刊行した。この年は一月から一二月にかけて『民国日報』だけでも延べ四七回（連載を含む）にわたって新・旧劇についての評論を掲載しており、まさに脂の乗りきった感じであった。そしてまたこの年こそかれが二人の新劇運動家、鄭正秋・鄭鷗鵠と血盟の交わりを結んだ年でもある。その契機となったのは日中秘密軍事協定に反対して行なわれた留日学生の一斉帰国運動であったのだが、それには後で触れることにして先ず二人の鄭のそれまでの軌跡を遡ってみることにしよう。

鄭正秋（一八八八—一九三五）は原名伯常、別号藥風、広東省潮陽縣の人⁵。幼時、上海の阿片商の養子「螟蛉子」に貰われたとも、家族とともに上海に移り住んだとも言われるが、育才公学に進んだ後、家業を継ぐか官途に就くかという親の期待に反して芝居にのめりこんだ。やがて長編の劇評を革命派の新聞『民立報』に投稿したのがきっかけで于右任の知遇を得、武昌起義が起ると革命に題材を取った四幕物の「時事新劇 鉄血鴛鴦」を『民立報』に連載したりもした⁶。一九一二年二月、かれは同盟会の急進派による自由党の結成に参加し、その機関紙『民権報』の劇評欄、ついで『中華民報』の劇評欄をも担当した。かれが共和革命の支持者であったことは言うまでもないが、同時期にかれは「戯曲を改良して社会・風俗を革新「移易」する」志を立て、『凶画劇報』を創刊して趣旨を宣伝する一方、名優たちの間を奔走し遊説し、ともに語るに足る人物のまれなことをも知ったと

いう。

たまたま一九一三年、アメリカ人が上海に亜細亜影戲公司を設け、資金・資材を提供して買弁の青年張石川に映画の制作を請け負わせた。張は舅父（母方のおじ）の経営三や鄭正秋を語らって新民公司を作り、演劇界に顔の利く鄭に役者を集めさせ、かつ「編劇」⁽⁸⁾させて映画「難夫難妻」を撮影した。鄭はその「社会を改革し、大衆を教化する」理念から、自分の郷里潮州の売買婚の習俗にテーマを求め、封建的婚姻制度の不合理を訴えようとしたのである。ところが、その撮影はすぐに終わり、フィルムも一時底をついて仕事は長期にわたって途絶えた。鄭正秋は無名の貧しい役者を集め、かれらに宿舍と食事を提供していたので、たちまち窮地に陥った。⁽⁹⁾救済策としてかれは新民新劇研究所を興し、かれらに教育と訓練を施した上で、ついにこの年一〇月、職業劇団「新民新劇社」の旗を挙げた。周劍雲が新劇家から劇評家に転身したのに対し、鄭正秋は逆に劇評家から新劇家に転身し、かつこの時から風俗を正すという意味で「葉風」を号したのである。

新民社は家庭劇で売り出した。⁽¹⁰⁾当初、赤字の連続であった公演も、やがて安定した成績を上げられるようになったところ、新劇は儲かると見た旧新民公司の経営三らも別に民鳴社を組織し、新民社の役者を引き抜くなどして両者は激しい競争・対抗の関係に入る。他にも旗揚げする劇団が相次ぎ（啓民社もその一つ）、一九一四年は上海で新劇の「極盛時代」と称されたほどだが、好人物の鄭正秋は新民社に招聘した有名役者・汪優遊らに社の主導権を奪われた上に、資金力・宣伝力のいづれでも民鳴社に太刀打ちできず、ついに張石川の提案をいれて一五年一月、新民社の民鳴社への吸収合併を承認せざるをえなくなった。⁽¹¹⁾まもなく彼は民鳴社を離れるが、この年漢口で大中華劇社を名乗って興行したさい、袁世凱の二一カ条要求への屈伏と帝制陰謀とに憤激し、植民地の惨状を訴え、袁世凱を風刺した無言劇「隱痛」を編んで主演し、大いに物議を醸したという。周劍雲が舞台で大演説をぶつたのとあい前後する。

鄭鷓鴣（一八八一？—一九二五）、本名は廉、字は介塵、安徽歙縣の人。⁽¹²⁾陸軍武備学堂を卒業して軍界にあったが、革命活動のため逮捕されそうになり、一時、商業界に身を隠していた。中華民國成立後、官途に就いたものの、一三年、党派抗争に愛激

をつかして身を退き、一四年、新劇同志会（春柳社）に入つて本格的に芝居を学んだという異色の経歴の持主である。春柳社の解散後はもっぱら京劇を研究しつつ時に舞台に客演することがあったが、一六年夏、鄭正秋が葉風劇学館を上海に主宰したさい、スタッフ「佐教」に迎えられ、おおいに意気投合する。「正秋の忠厚誠懇を君（鄭鶴鳴）の老成練達をもつて輔い、魚の水を得たるがごとく、須臾も離るべからず。是れより正秋、凡そ劇場の組織有れば必ず君と商り、君また其の智能を竭して正秋を輔く。朋友なりと雖も手足も速ばざるところあり」と周劍雲は書いている。⁽¹³⁾

鄭正秋は新劇のために家産を傾けた。「六年の心血を耗し、四万の金銭を蝕した」とは一九一八年の述懐であるが、育てた多くの役者に裏切られ、わずかに学校演劇の指導に希望を託していた。そのころ独立した劇団は無くなり、劇場主が役者を集めて興行する形がとられ、鄭正秋らも舞台を転々としていた。そこへ五月、寺内内閣と段祺瑞政権とが結んだ日中秘密軍事協定を二一カ条要求の第五項の実施、中国を「第二の朝鮮」とする陰謀だとして、留日学生が一斉帰国し救国のため決起するよう人々に訴える運動がおこつた。上海はその拠点となつた。鄭正秋はこの事態に奮起した。

周劍雲は一六年らしい正秋と相識の間柄であつたというが、新たに劇団を組織したいという正秋に先ず反対した、「演員に人格無し、新劇は為すべからず。子、金銭を虚牝に擲ち反つて虎を養つて身を傷つくる勿れ」と。鄭は応ずる、けつして自分を逐つた劇場や新劇団と張り合おうというのではない、「此の留日学生の輟學帰国、民国危急存亡の秋に當つて、鳴新社と笑舞台と、志は賢利に在り、更より国事を談ずるに配せず。吾此の時に於いて大声疾呼、国人未だ死せざるの心を警醒せしめずんば、人將た正秋を謂いて何如なる人と為さんや」と。周劍雲とて憂国の念はかれに劣らぬ、ついに「子、大声疾呼し国人の迷夢を撃破せんと欲すれば、此れ其の時ぞ」とかえつて励ますことになつた。⁽¹⁴⁾かくて一八年旧曆の四月（陽曆の五月末か六月初め）、鄭正秋の主宰する葉風新劇場が旗揚げした。出物は「熱血」（トスカの翻案）「隱痛」「賣国將軍」「窃国賊」（ハムレットの翻案）「賣国奴」「徐錫齡刺恩銘」等々、外題を見ただけで知れる、いわゆる国事劇であつた。

一二月、かれら三人は施濟群（鴛鴦胡蝶派の作家）ら六人とともに出版社・新民図書館の設立を發起する。「同人、狂瀾を力

挽し誨淫の書籍を革除せんと志を抱き、新思想・新学説をもって世界の潮流に應ぜんとす」というのが趣意であつた。⁽¹⁵⁾新民の二字は新民公司のばあいと同様、かれら、とくに鄭正秋の社会教育への思い入れを反映したものだつたらう。新思想・新学説とは当然おりからの新文化運動を念頭に置いての表現であつたと思われる。

葉風新劇場は出演していた遊戯場「新世界」で遊戯報『新世界報』を一新もした。社長に鄭正秋、編輯主任に周劍雲、図画主任に孫雪泥、発行主任に鄭鷓鴣、廣告主任に張巨川（張石川の弟）という顔触れであつた。「今や、淫穢の新劇社すでに葉風により推轡されると雖も、第だ^た悪劣なる新書店は方に大いに其の毒焰を張る。爰に^三新民図書館の設有り」。「葉風、現今の各小報類^{おれ}ね皆守成して競う勿きを環視し、乃ち……劍雲を特約し、相ともに之を振作せんとす。劍雲は本（文？）壇の健将、編む所の菊部叢刊は尤も名南北に重しと為す。本報の筆政を総べしむるは固より大才小用に属するも、顧^ただ葉風の志を成さんと欲し、將に本報を以て書館と相輔けて行なわんとす。薄俗を励まさんと冀うてなり」と『申報』の廣告「新世界報革新啓事」（一九一九年三月四日）にうたう。新民図書館の発足をもつて周劍雲・鄭正秋・鄭鷓鴣のトリオが結ばれたと見るゆえんである。

歐陽予倩は一九一三年、長沙でその名も「社会教育団」という新劇団に加わつたことがある。日本から専門家を呼んだ舞台装置の珍しさと社会風刺・政治風刺の出し物が人気を呼んでたいへんな成功を収めた。しかし、第二革命の敗北で劇団は弾圧され、かれも一時潜行をよぎなくされたという。辛亥革命前、政治宣伝を自覚的に担つた新劇・文明戲が、共和成立とともに社会教育を己が任としたことは長沙の劇団名が端的に示すが、新民社も啓民社も自覚的にその一翼を担わんとしたものであつた。新劇はその後俗悪な商業主義路線に走り、「文明戲化」と揶揄されるまでにいたるが、周劍雲・鄭正秋・鄭鷓鴣は初心を堅持しつつ、民族的危機感に迫られ、さらに新思想の刺激をも受けて演劇から出版へとその戦線を上げようとしていた。

二 実業救国・教育救国

新民図書館は五月初めに開業した。同時に発行した五種の単行本にはとりわけて挑戦的な内容を窺わせるものはなかったが、五四事件を承けてさっそく大中華国民編・愛国社発行『章宗祥（賣国賊之一）』、粵東間鶴編・華民書社発行『曹汝霖（賣国賊之一）』などを発売してたちまち版を重ね、運動に呼応した。前者については「請看外交四大金剛之一章宗祥歴史」と、五月七日から一日にかけて連日、『民国日報』・『申報』などに出版予告を載せ、「本館（新民図書館）は民気を鼓舞し国人の一致救国を促さんが為め、特に章氏一生の歴史を搜集し、其の行為心術を述べ、旁がた家庭の軼事に及ぶ」云々とその趣意を明らかにしている。愛国社といい華民書社というが、言論弾圧を顧慮してのことで、実体は新民図書館そのものであったことは先ず間違いない。事実、五月二六日に発売した『章宗祥』の文中の「去章」の二字が「中華民國政府への反対を提倡し、および治安を妨礙するの字意有り、現行刑律第二百二十一条に違反する」とされて、「該館經理鄭介塵」（鷓鴣）が工部局の「公堂」に召喚されるといふ一幕もあったのである。⁽²⁾

六三運動において、周劍雲が各劇場の公演停止のため活動したこと、上海学生聯合會の職員として運動にかかわつたらしいこととはすでに述べた。さらに運動が一段落した七月五日・六日、かれは鄭正秋・鄭鵬鵠とともに新劇界の有志を糾合し、学生聯合會の財政支援のために二夜連続のチャリティー公演をおこなった。鄭正秋が編演主任となり、初日に家庭悲劇「新黄梁」無言劇「隱痛」を上演し、二日めに愛国新劇「兄弟愛国」を掛ける予定であったところ、警察の干渉がはいった。初日の芝居に「人心を煽惑する処有り、演劇の宗旨と符せ」ざるにより、明日の上演は禁止するといふのである。必死の折衝の結果、「劇情激烈」でなければということで、演目を急遽「珊瑚」に変更してようやく開演した。男女の学生・ボーイスカウト「童子軍」が案内係・整理係をつとめて雰囲気盛りあげ、経費を差しひき両日で一—二千元の純益をあげた模様と報ぜられている（「各界同志

演劇助捐「『民国日報』一九一九年七月二日、「上海大戲院之義務戲」同七月七日）。

各路商界聯合會の組織づくりにあたっては彼らが積極的に参加したこともすでに述べた。とくに鄭鷓鴣は一〇月一二日に結成された山東路商界聯合會で幹事長に推され、總聯合會への出席代表（二名）の選挙では、会長を凌ぐ最高得票を得たほどであった。⁽³⁾ その貢献の大きさを窺うにたる。

周劍雲はようやく成立にこぎつけた上海各路商界總聯合會について、次のような感想を寄せている（『民国日報』および「時事新報」一九一九年一〇月二八日・二九日）。煩をいとわず全文を紹介してみよう。

一〇月二六日は上海各路商界總聯合會成立の日であった。この日、市中の各商店はみな旗を掲げて慶祝した。出席したのは十九路（公式には二三路——引用者）の商界聯合會の代表および各路の会員、各界の來賓で千人を超え、商務總會の会場はびっしり埋まった。この空前未曾有の盛會を見て私はたいへん愉快であった。当日、私も演説を準備していたのだが、演説する人があまりにも多くて時間が長引き（二時半から五時半までたっぷり三時間）、聴く人も疲れたし時間も遅くなった。予定していながら演説していない人も私一人ではないのを見、止めにしたのである。ただ、私はこの会にたいし大きな期待をもっており、いささか意見もある。今日は紙面を借りて發表させてもらいたい。

戴季陶先生は民国八年は中国のはなはだ記念すべき年である、なぜなら前七年の人はみな氣絶しており、今になってやっと息を吹きかえたからだと言われた。私は言いたい、中華民國は建国八年になるが、前七年の人民はみな約法第一条「中華民國主權在國民全体」の十一字を知らなかった、言い換えると前七年の人民はみなすでに「民主国」に変わったことに注意せず、今になってやっと自覺したのだと。一步遅れをとり多くの大事を誤ったが、これから以降急起直追し、日々進歩を求めさえすれば、中華民國の國魂は死してまた甦る日がきつとくる。中華民國の民族が世界の民族と同じ水平線上に立つ日がきつとくる。

中華民國は四千年の専制の余毒を承け、利祿に眼の眩んだ悪人どもが、自らには厚く人には薄く、各界人民の職業「執業」

の違いによって、いわれもなしに極めて不平等な階級制度をつくり、多くの人の天賦の人権・思想の自由をがちりと縛り上げたのだ。かの悪官僚・悪紳士および功名富貴を望んで廉恥道徳を顧みぬ読書人どもは商人を見下げ、眼中にも置かない。かわいそうに以前の商人は自分で自分を卑しめていたが、今になってやっと工商界と国家との関係がはっきりしてきた。工商界の人間は生産者「生利的人」であり寄生者「分利的人」ではなく、自分で生きていける人間である。耕さずして食らい織らずして衣る手合いではないのだ。

上海には以前商務總會というのがあったのではないか、この商務總會は商界の連合機関ではないのか。商人はなぜそれを信任しないのか。今なぜまた各路商界総聯合會を組織するのか。私はあえて商人に代って回答しよう、例の数人の紳士派半官派の会長は自己の身分をたいしたものだと思ひ込み、官僚の鼻息を伺い官界のために奔走することしか知らず、あの鼻持ちならぬ勲章「嘉禾章」をもらうことしか考えていないからだ。はたして洪憲時代には道尹を一人出し、今年はまだ媚日派を二人出した。商人の公意を代表できず、商界のために福利も謀れないとあつては、こんな団体がなんの役に立とうか。

洪憲時代云々とは袁世凱の帝制陰謀に加担して当時の總商會總理周晉鑣が上海道尹に拔擢されたことを指し、媚日派二人とは五月七日、公電を發して対日妥協を主張した會長朱葆三、副會長沈聯芳を指す。大商人・大買弁の總商會に對抗してこの年三月、各業界・各同郷団体五六をもつて上海商業公団聯合會がつくられていたが、それにもあきたらず、いまや罷市を最前線で担った各地域の中小商工業者を結集して、下から上へ商界聯合會が組みあげられてきたのである。

二十六日に成立した各路商界總聯合會は以前の商会とは違う。第一に商人に自覚があり完全に自發性をもつて生れたこと、第二にこの会の組織は先ず各所で商界聯合會を組織して各路の職員を選出し、さらに各路の職員が二人の代表を選出し、それらの代表によって総董一人、副董二人を選出したこと。将来上海に市政に参与する権利ができればこうした段階的手続きを踏むだろうが、この会は完備「完善」したものとよい。

私はこの会との関係が非常に深いので二つの感想をもつた。

一 商人はなぜ連合せねばならないか。商界の勢力を増強し、将来、外にたいしてばらばらに「各自為謀」ではなく一致した歩調をとろうとするからである。勢力の二字はもとも良い意味には使われないが、それが何に用いられるかを見る必要がある。もし勢力を笠にきて人を害し己れを利用するようなことをすれば、勢力はいけないものだ。もし勢力に頼って公共の幸福になることをやれば、組織の力は非常に大きい。商人は一方で勢力を増大させれば他方で責任も重くなることを理解「明白」せねばならぬ。勢力が大きくなればなるほど、責任も重くなるのだ。商界がこの会を持ったからには、今後一切の利害にかかわる問題はすべてこの会を通じて解決せねばならず、看板到れの存在にさせてはならない。着実に実績を上げて「切切实実做点事出来」各界に示す必要がある、というのは当日馬駿先生（天津学生聯合會代表——引用者注）の述べた「奮発有為」の結びのことばであった。

二 総聯合會が商界の自発的に組織した公共機関であるからには、この会で選出された董事は人民の選挙による代議士と同じで、個人の行為は商界全体の名誉にかかわる。必ず立場を弁え「顧名思義」商人のために公共の幸福を謀らねばならず、欲に眼が眩んで官界に接近し官僚に利用されるようなことは、絶対にあつてはならない。

この会の成立後、商人自身はもちろん大きな期待を持っており、私も付け加えることはない。ただ小さなことだが二つだけ、商人が何時でも何処でもやれることで、私が一刻も猶予できぬ問題だと考えることがある。

一 中国商人の悪習慣、例えば店員「店夥」の学徒（見習い）にたいする不平等な態度、店員の顧客にたいする横柄な対応「不謙和的面目」、主人「老板」の外部の人「外界」にたいする不誠実、すなわち詐欺的な手段などはすべて逐次改革・排除すべきである。

二 中国の商人は教育を受けた者が少なく、常識に欠けている。学徒は店に立ち「站櫃台」、店員に仕えることしか知らず、天賦の知識があつてもそれを啓発されずにいる。まことに憐れむべく惜しむべきことだ。商界の専門の人材を商業専門学校で養成するほかに、これらの見習いにたいしては各路の商界聯合會が義務夜館を設け、每晚二時間を割いて授業を受けさせ

ねばならない。

今私はこの意見を書き終えて、衷心より上海各路商界総聯合會の万歳、中国商人の万歳を寿ぐものである。

周劍雲は商界聯合會の前途に大きな期待を寄せながら、商人・商店の悪習慣・悪弊の改革、「学徒」（見習い店員）にたいする教育の普及を急務として指摘した。ただかれのばあい、それは単なる評論ではなく、自らの実践課題だったのである。商界の改革について言えば、六三運動で威力を見せた「商学両界の携手」をさらに持続的な運動として推進することである。このばあい「学」は必ずしも学生を意味しない。これまで「商」を末業として蔑んできた知識人が自覚的に商人・商業と提携し、「二〇世紀の商戦世界」に挑むことなしには中国の未来はない。かれらは商界の組織づくりに熱心に参与する一方、商業上の「秘訣」の公開、ノーハウの普及のために新機軸を打ちだした。二〇年一月、新民図書館は周劍雲主編・鄭鷓鴣校訂の『商業実用全書』巻一・巻二を公刊したが、序文を寄せた者は一〇人、穆藕初を除けば上海学聯前評議長狄侃（狄山）、同現会長程学愉（天放）、民国日報主筆葉楚傖など知識人、広義の学界に属する者ばかりである。

そのうちの一人鄭鷓鴣の序文によれば、商界に身を置きながら文学を好み、『葉風日刊』（鄭正秋の劇団機関紙であろう）に寄稿してくれていた谷劍塵が、自分の筆記「錢業常識」を見せてくれたのがきっかけであったという。「中国の商界は素と秘密主義を厳守す。孰んぞ料らん、数千年来の陋習一旦にして子により破られんとは」と感激した鄭は周劍雲と謀り、各業の専門家に頼んで総合的な実用書を企画したのだという。巻頭はもちろん谷劍塵著「錢業」であるが、続いて「金業」、「漆業」、「麵業」等々とそれぞれの業種について、仕入・工程・管理・出荷の各過程の実用知識を紹介する、「紡織業」においてはその性格上、労務管理のノーハウがスペースの大部分を占めているといった本である。周劍雲自身は「弁言」の筆をとってこう述べている。

五四運動既に起り春雷耳を震わし大地昭蘇す。商学両界は携手して共進し、能力の至る所、一たび之れを国賊を罷免するに見、再び之れを徳約を拒簽する（対独講和条約の調印拒否）に見、三たび之れを劣貨を抵制するに見る。……今後の対外戦争は將に兵に在らずして商に在らんとするに……試みに国内商業の状況を觀れば、天賦の原料は人に仮手し、舶来の貨品は

市塵に充斥す。人の唾余を巧こい藉りて温飽を謀り、祇ただ近利に務めて遠き慮り無し。此れを以て戦いを言うも、將に人は一弾をも發せず一卒をも喪わずして大いに全勝を獲、我は則ち抱頭鼠竄、錐を立つるに地無きを見んとす。

語に之れ有り、工其の事を善くせんと欲すれば必ず先ず其の器を利にすと。工商は固より連帯關係ある者なれば、則ち商業公開は実に当務の急と為す。否しからずんば則ち抵制を空言するも相当替代の品無く、一時の感情作用にては断じて持久し難し。吾国、相当の替代品無きには非ず。出産の富は世界に冠絶す。苟も能く変通改良すれば直ちに之れを用いて竭きざる可し。商人の能力は既すでに世に表現したるも更に望むらくは此れを継ぎて全功を竣おえんことを。勢いに因りて之れを利導するは則ちわち吾が図書界の責め、此れ同人商業実用全書の刊ある所以なり。

同人は皆商業中の人に非ず。居恒つねづね実業救国の説に服膺し、雅はなはだ皮毛を撫拾し名を盗み世を欺くを願わず。此の書の取材は咸な商人の手筆に出ず。其の著述す能わざる者あれば、則ち其の口述を請いて本館編輯員に由り之れを筆録す。歴時半載、僅かに両卷を成すも、文士弄墨の習い無く濫竽充数の弊鮮きは、此れ同人の敢えて自信する所なり。

中国人の最大の欠陥はすべて秘密にして公にしたがらないことにある、古人のすばらしい發明・技術は欧米にひけをとるものではなかつたのに、彼は一般に公開して改良を加え、我は家伝数代ならずして跡を絶つ結果となっている、とは程学愉の序に見る慨嘆であるが、周劍雲・鄭鷓鴣たちは威勢のよい「抵制劣貨」の限界を冷静に見きわめ、「実業救国」への出版人としての具體的貢獻をこの書に託したのである。谷劍塵はさらに二二年、上海の少年宣講団（一九二二年以来活動してきた社会教育団体）から『新商人之修養』を出し、新民図書館が発売しているが、商業・商人の慣習・道德を改造すること、それも近代的商習慣・商業道德の確立というよりは、実業救国に服務する商業・商人のありようを模索する方向で、周・鄭兩人と志を同じくしていたのではなからうか。谷劍塵は後に映画事業でかれらの協力者となる。

周劍雲が尽力したもう一つの事業は、自身が提案した「学徒」への義務（無料）教育である。五四運動が引き金となって高揚した教育救国の世論のなかで、総聯合會成立前後から各路の商界聯合會は義務学校の設立に取り組んだ。かれは山東路商聯合會の

職員として、二〇年三月、同路の義務夜校（鄭鷓鴣校長）の開設とともに、国文担当の教員を引受け、さらに教務長、九月には鄭鷓鴣と交替して校長と、ついにはその最高責任を受持つことになった。⁽⁶⁾同夜校の教員にはかれら職員が奉仕で当たるほか外部からも招いたが、そのなかに顧肯夫（英文）、嚴譔声（国文）の名のあったこと、河南路義務学校では邵力子校長、黄警頑（商務印書館）が教務主任を務めていたことが示すように、商界で活動する知識人たちの多くは義務学校の責務を進んで担当していたのである。⁽⁷⁾ともあれ教育救国を信念とする周劍雲は懸命にその職務を果たそうとするが、そこで逢着したさまざまな困難・矛盾とかれなりの打開案の詳細は次節にゆずることにしたい。

かれにとって義務学校への尽力と表裏の関係にあったのが、工商友誼会への参加である。店員たちは罷市への参加と救国十人団の活動などを通じて横の繋がりを持ち、待遇の改善と地位の向上をめざそうとした。一九年の後半から各業種に友誼会・聯誼会などの名目で店員の組織が生まれ、賃上げを要求した争議がしきりに起こる。上海工商友誼会は業種を越えた店員の結集をめざし、労働組合化を恐れる商店主らの妨害・圧迫を受けて難航しながら、二〇年一〇月一〇日、徐謙、沈玄廬、張繼、陳独秀、狄侃、唐豪、邵力子ら多くの来賓の祝福を受けて成立した。周劍雲も当日祝辞を述べたうちの一人であったが、準備段階から参与していた谷劍塵とともに、その職員に選出された。かれが評議長に選ばれ就任を固辞したことはすでに述べたが、評議部には他に山東路義務学校の英文教員方曉初、幹事部の総務科に鄭鷓鴣、文牘科に谷劍塵・沈求己（『解放画報』の常連の寄稿者）、交際科に費公侠の名が見える。⁽⁸⁾知識人の参加が組織の発足にあたって少なからぬ意味をもったことは疑いない。

工商友誼会には、これを階級的戦闘的組織に育てようと上海共産主義小組が肩入れをした。その機関誌『夥友報』（週刊）の発行も当初は新青年社が引き受けたほどである。しかし、周劍雲が主張したのは「温和な手段を採り、講演を聞かせ学校を運営し、男女労働者「工人」に知識を持たせ、品性を高めさせる」ことであった。「激烈な手段は最後の最後に至らねば用いない」という路線であり、おおかたの賛同を得たという。しかし、まもなく会内の職権をめぐるごたごたが起り、かれの主張もうやむやのうちに立ち消え、自身も友誼会から手を引くことになったようである。⁽⁹⁾

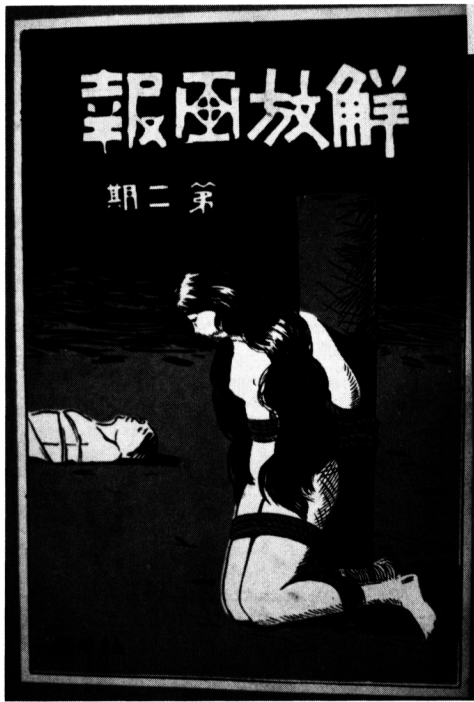
この間、かれや鄭鷓鴣の生活の基盤は新民図書館にあったと思われる。『商業実用全書』を世に問う時点で出版書は一四点を数えたというが（同書「弁言」）、二〇年六月の広告ではなんと五七種を掲げる⁽¹⁰⁾。その内には泰東書局が出した潘公展編『学生救国全史』や交通図書館旧刊の『鞞部叢刊』も含まれているから、全部が自社刊行物ではなく取次ぎ「経售」の分もあるのだろうが、『九尾狐』とか『黒衣盜』とか、どう見ても世道人心に益ありとはおもえぬ表題の本が、数から言えばむしろ多い。上海における出版社経営の難しさは、張静廬がその『在出版界二十年』（上海雜誌公司 一九三八年）に記すところである。素人が出版界に飛びこんだ周剣雲らの苦労のほどが、経営のためには理念に目を瞑ってもらわねばならぬ苦心のさまが、広告の書目に窺われようというものだ。

だが、使命感は健在である。一九二〇年、周剣雲らは五月四日を期して月刊雑誌『解放画報』を創刊する。大きな冒険であったはずである。

三 『解放画報』と婦女解放

鄭正秋は五四運動後、「価値のある」芝居を編もうと『新青年』『新潮』を揃えて買いこんだという⁽¹¹⁾。周剣雲も同様にあらためて新文化に目を見開き、新たな責務を自らに課したのである。もはや直情的な愛国主義の域は脱していた。『解放画報』一期「本報宣言」でかれは言う。

「五四」運動以後、国内で新思潮を鼓吹する書籍・雑誌・新聞は雨後の春筍のように到るところに生まれた。この鼓吹のどよめきによって麻薬に酔い痴れた多くの国民が喚び醒まされた。みんな夢から醒めて一線の曙光を目にした。この曙光からしだいに光明が放たれ、中国民族を暗黒の世界から離れさせたのだが、これこそ民国以来、もっとも希望にみちた大事件であった。



しかし、どれもこれも難しすぎ、学者の参考にはなっても平民には役立たない。また主張がいろいろどれが正しいのか判らないし、多くは適切な方法の提示を欠いている。人民があてどなく彷徨うこの過渡期にあつては、道を指し示すことが大事である。そのためには文章は易しく通俗的であればあるほど有効であり、問題は平凡で小さなことであればあるほど切実かつ有用である。

かくてわれらは同志数人とこの『解放画報』を出す。法律政治の問題は語らず、深遠な学理も論じない。それらについては専門の雑誌がすでにあるから、本報はきわめて平凡、きわめて切実な人生の問題をとりあげ、討論し批判し、解放の努力「工夫」をし、改造の努力をし、多数の平民を率い光明の道を歩んで、人間の生活を実現し、人間の責任を果たし、旧社会を革新し、われらが国家を振興する。これこそ本報同人の目標「宗旨」である。

ただ、創刊号の表紙は、若い女性が大姿見に姿を映すと鏡の向こうに太い綱で縛りあげられた自分がいるという三色刷りの絵であり、目次を見ても婦女解放を主題とした雑誌であることは明らかであるのに、宣言はそれをとくには謳いあげない。知識人「読書人」は古人の文章を「金科玉律」と崇め、功名富貴を追求するほかに能がな

いと非難し、あわせて婦女も衣食住をすべて男子に頼り、家庭のなかだけで生活し、男尊女卑を「万世不易」の「天経地義」としていと批判した箇所のほかに、次の一節があるだけである。

一国の人民は男女各々一半を占める。男子ができることは女子もできるし、男子が享受する利福は女子も享受すべきであり、男子が受ける苦痛は女子も受けねばならぬ。衣食は自分で求むべきであり、他人の施しに依存することはできない。天経地義がいったいなんだ。銅の牆、鉄の壁とて推し倒さねばならない。これができてはじめて国家は富強となる。これができてはじめて中華民國の国民たるにふさわしく、これができてはじめて二〇世紀の人間たるにふさわしい。

当然のことながら、『解放画報』はすべて「白話」を用い、「文言」の寄稿はたとえ詩であろうと受け付けない（徵文条例）。これ以前の周劍雲の文章は、目にし得たかぎりではすべて文言であるが、かれもここでは手慣れぬ白話文を書き綴らねばならなかった。画報といっても今日のそれとは異なる。各期、A5版七〇頁から百頁くらいまで、巻頭にグラビア二頁の美術画があり、二頁に一つくらいの割合で凸版の挿し絵、あまり鮮明でない写真がある程度で、あとは普通の雑誌と変わりはない。本文には「評論」「思潮」「新聞」「智識」「詩」「小説」「読者論壇」の各欄「門類」があり、三期からは「劇本」、六期からは「戲評」（劇評）「劇談」などが加わり、「読者論壇」は「通信」に代わる。周劍雲は評論・思潮・戲評など毎号に欠かさず筆を執り、とくに読者の通信への回答はかれひとりの担当するところであった。

かれの主張するのはもちろん女性解放である。「旧社会で解放されるべき人は婦女に限られず、研究すべき問題も婦女問題に限られない」が、「婦女は社会で大部分を占めており、婦女問題は他の問題よりも重要である。解放を論ずるなら当然先ず婦女から始めねばならない」からである。⁽²⁾ それをもっとも系統的に述べたのは、かれが楓涇県立第二高等女子小学に招かれて行なった講演、「婦女問題の将来」（『解放画報』二期に掲載）である。⁽³⁾ 「婦女問題が解決しなければ社会の改革に手が付けられぬだけでなく、国家を整頓することも絶望的であり、男女とも共倒れになって世界の潮流に淘汰されるだろう」として、女性が中心であった原始社会から、男性の付属物になり下がった皇帝専制時代までの歴史を回顧した上で、かれは言う。

三〇年前、大義を弁えた男子たちは欧米の新鮮な空気を呼吸し、自己の本性に目覚め「一旦明性見心」、奴隷たることを恥じ、苦痛を除去し社会を改革し国家を整頓しようとするれば、人民の公敵・専制皇帝を打倒するほかになく、革命を起こすほかにないことを知ったのです。かれらは目標を定め、先ず言論による鼓吹から始め、ついで同志に実行を促したのであります。一人が十に伝え、十人が百に伝え、百人が千に伝え、千人が万に伝え、覚醒した人はますます多くなりました。志有れば竟に成る、果たして目的を達したのであります。当初、革命を鼓吹したころ聴いて恐がらない者はなく、「大逆不道」だ「反乱」だと罵らない者はなかったのですが、ことが明白になってやっと自分の見識の狭さを知り、革命が理の当然であったことに気づいたのであります。

今、女性解放に反対する男性はもちろん女性も少なくはないが、三〇年前、革命が反対され痛罵されたのと同じことで、大勢の赴くところは如何ともしがたい。「男性が女性を征服し、女性を圧迫したのは、皇帝が生まれて以来のことで、それが打倒されたからには女権は回復されねばならず、旧礼教・旧制度は……存在の価値なく、女権を奪った諸点は、とりわけ（皇帝の消滅に伴って）改正さるべきである」。ただ、確認すべきは解放とは自由をかちとることであって男性に報復をすることではないということである。すべての制度は時代とともに進化するものであり、男性優位の社会も人類がかならず経過せねばならぬ段階だったのである。困るのは「解放」を「西方化」ととりちがえたモダンガール「自命為簇新的解放女子」で、なんでもかんでも欧米女性の真似をして識者の矚躑をかつているが、寄生していながら贅沢に走り生活程度を上げるのが解放と言えようか。玩弄物として男子に媚を売る手管が、いっそうこみいつてきただけではなからうか。

私の言う解放は男女対等の要求でありまして、婦女が男子に解放を要求する一方で男子も婦女に対して解放を要求するのがあります。どうして婦女は男子に解放を要求するのでしょうか。旧式の礼教・制度・習慣は手枷足枷・捕縄のように、数千年にわたり婦女を身動きのとれぬように縛り上げていて、もともと歩ける足があるのに歩かさず、働ける手があるのに働かず、ものを言える口があるのに口をきかせず、考えられる頭があるのに考えさせないのです。いまや、婦女は男子にこう

言うべきです、「あなたがたは私たちを牢獄にとじこめ、永遠に日の目を見せない。私たちは精神的肉体的にいやというほど苦痛を嘗めました。私たちは下されものの食事も衣服も住居も要りませんし、あなたがたの恩恵も受けたくないのです。私たちが解放して自分で労働し自分で生活させて下さい。私たちの能力がどれほどのものか、見ていて下さい」。男子が婦女に対し解放を要求するとはどういうことでしょうか。旧式の礼教・制度・習慣はもちろん男権を拡張し女子を圧迫しようとするのですが、あに凶らんや男子もその害を受けているのです。男子の権力が大きいほどその責任も重くなり、自立できない婦女は遠慮もなくかれによりかかる、男子はひとり数人以上の生計を支えて疲労困憊、天才があっても十分に発揮できない、婦女のおともをして監獄に入り、同じように手枷足枷を付けられているのです。いまや、男子は婦女に対してこう言うべきです、「君たちはわれわれの身体を縛り上げ、妻子の牛馬として終日こき使っている。家庭をもつて一生損をしている。一人の収入ではとうてい大勢の出費は賄いきれない。君たちはどこも悪いところはないのに、なぜ家において無駄飯ばかり食い、外に出て活動しないのか。われわれは精神的肉体的にいやというほど苦痛を嘗めた。生活程度がこんなに高くなつては、とてもじゃないが支えきれない。君たち早く手を緩めてわれわれを解放してくれ。みんなで手分けして分担すれば、今の状態よりずっと良くなるよ」。

現在は過渡期であり、「青黄不接」の時期である。「旧道徳はすでに崩壊したのに新道徳はまだ打ち建てられていない。旧制度は破産しようとしているのに新制度はまだ組織されていない」。こういう時期にいろんな良くない現象が起こるのは避けられぬことであるが、頭の固い古い世代に対しては、なんとか我慢して「養老送死」の責任を果たすとしても、新しい世代「幼輩」には自分たちが受けた苦しみを二度と嘗めさせてはならず、「かれらの人生観を変えてやらねばならない」。そこで大きな役割を果たすのは教育、重くのしかかるのは結婚である。

教育部の統計を見ますと、全国の女学生の総数は二〇万人にすぎません。……しかも、女子の学校は最高でも中学・師範どまり、大学および専門学校はないのです。また女子高等小学・中学・師範学校を男子の同等の学校と較べると程度に相当の

ひらきがあります。だから現在の婦女は解放の必要がなければそれまで、もし解放を欲するならば、まず教育を受けねばなりません。女学校の程度を向上させ、男女同校を要求し、死んだ教育を生きた教育に改め、機械的教育を実質的教育に改めさせて、はじめて女子に活路が開かれるであります。高等教育を受けたのちは必ずから相当の職業がありましようし、職業があれば必ずから経済権も生じます。経済権があれば怖いものなしです。

婚姻問題は恋愛を基礎とし、社交を手段とし、結婚を目的としなければなりません。早婚は禁止し、男子は二〇歳から三〇歳、女子は一八歳から二八歳を適当とします。父母がどうしても取り決めるといふなら、最低限度本人の同意を得ねばなりません。私は結納「聘儀」嫁入り道具「妝奩」および一切の繁文縟礼・浪費を廃止し、厳格な一夫一婦制度を採り、たがいに貞操を守り、妾を納れること娼妓を買うことを禁止し、死後の再婚「統娶・再嫁」を許し、同時に社会の娼妓制度を廃止することを主張するものです。大家庭制は弊害が多すぎるので小家庭制に改め、童養媳と婢女を廃止すべきであります。遺産は公有に帰し必ずしも継承しないのが一番よいと思いますが、そうでなければ男女ともに享受すべきであり、子が無くとも嗣子を立てる必要はありません。

「男子と同等の教育を受け、経済的独立を謀る」ことこそ女性解放の鍵だというのは周剣雲の持論であった。⁴⁾婚姻制度を修正し、核家族「単級家庭」を基本とすることがそれと表裏の関係をなしていた。親は子女に養育・教育の責任をはたす（もちろん男女の分け隔てなく）だけで責任を終え、その自立後すなわち経済的自立後は結婚に干渉せず、援助せず、子も親が労働能力を失った後にのみ養生送死の責めを負うとは、すでにその「親たる人と子たる人へ」「告做人父母的人和做人子女的人」(『解放画報』二期 評論)で詳説するところであり、この講演録では、相統権の問題もふくめてその部分には簡単にしか触れない。では、おりしもかまびすしく論じられていた婦人参政権についてはどうか。

男女はともに一国の政治のなかにおり、時々刻々関係が生じておりますから、無知な商人のように商売第一、政治は知らぬ「在商言商、不談政治」ではすまされません。婦女の参政はもちろん正当な要求であります。しかし、中国の政治は数千年

の専制の余毒を承けて汚濁しきっており、いっぺんには肅清できそうにありません。現在の婦女は監督の立場をとるのが望ましく、必ずしもそれに加入しなくてもよいのではないのでしょうか。同時に連合して運動し、法律の条文を改正して婦女を除外できないよう要求すべきではありません。

かれは婦人参政権には消極的な姿勢しか示さない。同じく当時女性解放論の話題の一つであった児童公育についても、「個人的意見を言えば、母親と児童とは自然の情愛「感情」、すなわち天性がありまして、婦女は公育に委ねることを肯んじないのではありますまいか。しかし、公育の長所を言う人もたいへん多く、将来あるいは実行されるかもしれません」と保留するのである。当時最先端をいく議論であった家族解体、婚姻廃止にいたっては、断固として反対であった。

国家主義が廃止される以前にあつては、社会に衣食住の公共機関はない。ある人々は放言高論して家庭を打破し婚姻を廃止しようというが、實際上やれることではなく、ただ鬱憤をはらすだけ「徒快心意」にすぎない。我々は絶対に付和しない。何人かやってみた人もあるが、その「自由恋愛」の結果は危険かつ惨憺たるものであつた「危険！糟糕！」。かの「家庭打破」を主張する人は家長に金をせびるしか能はなく、金を使いはたせば、もう手も足もでないのである。こうした事理に合わず、噓に因つて食を廃するようやりかたは、幸福を台無しにし害悪をすでに流している「害処却已發現！」。過渡の時代にあつては、私は流行派「时髦派」(こうした人を私は新人物とは認めない、かれは流行を真似ているだけだ)に罵られようと、頑固党に憎まれようとかまわぬ。本を正し源を清めるには婚姻制度を修正し、家庭を改組することしかないと思じている。それが全人類にとつて有益なことだからである。⁽⁵⁾

「頑固守旧派は私を新しすぎるとし、任性直行派は旧すぎるといふ。私はほんとに『過渡時代の過渡人』になつた⁽⁶⁾」と周劍雲は自嘲する。当面を過渡期、しかもそうとう長期にわたる過渡の時代ととらえるかれは、「救国の根本方法はなにか？」(『解放画報』五期 思潮)で「国家主義が打破されねば、世界は永久の和平を望むことはできず、人類も永久の幸福を享受できないが、二十世紀中に大同世界を実現することはおそらく不可能であろう」とし、依然たる弱肉強食の世界にあつては「理想論を唱えて

はおれない「我們不願唱高調」、国家を愛し、国を救う方途を探らねばならないとする。辛亥革命において先烈の犠牲のおかげで、人民は座して共和の幸福を享け、中国の前途に希望を寄せたが、事態はますます悪化した。「去年の五月、国民は外患の圧迫を受け、一時感情に衝き動かされ、自衛のために二回の大運動——北京の『五四』、上海の『六三』——を起こした」。国民はまた「一条の光明」を見いだしたように、新たな希望を抱いている。

表面から見れば、一年来、平民の組織した団体はたしかに少なくないが、内容を仔細に検討すると、少数のリーダー「首領」がひっかまえている「包辦」だけで、大多数の構成員は袖手傍観しているのみか、関心すらもたない。少数のリーダーでも良心をもち廉恥を知る者ならば、進んで責めを負い真剣に仕事をするが、空元気のでしゃばり好きは「那慣耍空心拳頭、祇顧出風頭」この機会に乘じ、団体の名義を利用して虚名を博する「造成一個偶像」。ひどい奴は卑劣な手を使ってその団体を裏切ることさえするが、みんな気にも留めず「還是朦在鼓裏」、なんの意見も聴かれぬ。総じてこの種少数のリーダーの請け負う団体は、善意と悪意とにかかわらず、その基礎は脆くその力は弱い。つまり頼りにならないのである。

『五四』以後最大の効果があったのは日貨排斥ではなかったか。国民が万衆一心だった時、日本はどうして影響を受けずにおられたろうか。しかし、現在はどうか。実地調査をしてみれば、心ある人ならまた悲観してしまうのではあるまいか。……国民の一時的感情の衝動と少数のリーダーの代表する民意とは、日貨排斥は五分間の熱さとまでは言わずとも、日本の言葉を借りれば六カ月が限度であり、なにごとによらず持久できないのである。口頭での、新聞紙上での救国方法は、みな根本の方法ではない。

中国の最大の弱点は大多数の人民が普通の学識をもたず、徹底した自覚を欠いていることにある。少数者がいくら奔走・呼号しても、ことが済めばすぐ忘れられる。まして流動しているのは限られた大都市だけとあっては、「少数中の少数」ではないか。「国民の程度を高め、国家の基礎を固めようとするれば、教育の普及から手をつけねばならず、教育を普及しようとするれば、より多く義務学校をつくることから始めねばならない」。中国の公立私立の学校は増加はしてきているが、いづれも学費を要求し、

金のない大多数の「平民」には高嶺の花も同様である。「平民」に相当の教育を受けさせ、その資質・能力を開発して社会・国家のために人材を育成するにはこれしか方法はない。ソヴィエト連邦がその手本を示している。

労農ロシアの布告に言う、「労農共和国の全人民はすべて読み書きができなくてはならない。八歳以上五〇歳以下のロシア国民で字を知らぬ者は一律に文字を学習しなければならぬ。一切の識字者は、字を識らぬ者に教授する責任を有する。おおよそ成人で字を識らぬために読み方書き方を学習する者は、その教育期間中は労働時間を二時間短縮することができる。」これはわが国のもつとも良いお手本である。自問する、われわれにこのような熱誠と決心があるかどうか。

一年来の文化運動は實際上たいした進歩はなかったが、ただ各地で義務学校が増設されたことだけは、やや人の意を強うするに足り、中国の前途にもつとも希望を抱かせるものである。……みなさんがもし国を愛するならば、我が中国四億人中、教育を受けた者は男で百分の十、女は千分の二十に満たぬことを片時もお忘れないように。金ある者は金を出し、力ある者は力を出し、いっしょに努力して義務教育を興そうではないか。

しかし、周剣雲の大勢疾呼も期待したような反響は呼び起こさなかった。同じ第五期の「本報啓事」は嘆いて言う。

同人はこの半年來、いささかの誠意と乏しい力量を社会にささげ、婦女界をして自身の苦痛を自覚させ、自発・自決の精神をもつて不断に解放し、不断に改造するよう働きかけてきた。幸い文字・図画の効果で、社会の注目を浴び、販売部数も増加し、本誌も一定の役割を果たしたといつてよい。ただ、同人の最初の趣旨「志願」では、われわれが提唱の責任を負い、支援の義務を尽くし、一切の問題は婦女界の自己解決に任せるといふことであつたが、半年來寄せられた文稿・画稿は男子の作品が多くて女子の作品は少なかった。これはわれわれにとつてたいへん遺憾な事である。

義務教育については、彼自身の足元から問題が提起された。自分が校長を務める山東路商界聯合會の義務夜校の生徒からの訴えである（萬志雲「なぜ学徒の解放を提倡しないのか？」「解放画報」六期 読者論壇）。

一年來、私は新聞雑誌に「女子解放！旧家庭制打破！」などと書かれているのを見ると、言い知れぬ感慨をもよおす。自覚

した男子は女子が永遠に「悪家庭」の束縛を受けているのを見るに忍びず、極力彼女らのために女子解放を提唱しているのがあるが、われわれ男子で「商店」に隷属している学徒の受ける「老板（店主）」「經理（番頭）」の専制圧迫は、女子が受ける「悪家庭」の束縛と大差はない。なのにどうして学徒解放を提唱する人はいないのか。五四以後、各馬路みな「商界聯合會」を組織し、各会はいずれも義務夜校を設けた。しかし、義務夜校の学生はなぜか知らぬが非常に少ない。一筋の馬路に少なくとも三、四百軒の商店があり、五、六百人の学徒がいるはずなのに、義務夜校に申し込んだ者は一〇分の一にすぎなかった。開講の時にするとさらに少なくなっている。私も義務夜校の学生だったので、最初は同学の少ないのを見て向学心の乏しいのを嘆いたものだった。今、自分が「經理」の圧迫を受け義務夜校へ通えなくなつて、はじめて彼らが勉強にこなかつたのは、みな他人の圧迫を受けたからで、自分の意志「心願」によるものでないことを知つた。この原因が明らかになつたからには、なんとかして老板・經理の専制・制約を打破し、当然の自由を回復せざるを得ないが、われわれ学徒にはなんの実力もなく、かれらに許可を請求する以外に手立てはない。ただ同胞が女子解放を提唱する余力をもつて、われわれとともに学徒の自覚を喚起し、みんなで組織をつくり、協力して暗黒勢力と奮闘してくれるよう希望するのみである。

周劍雲のコメント「附誌」によると、かれはある布号の学徒で非常に熱心かつ優秀な生徒であつたが、突然、老板から通学を禁止されたのだという。手紙で事情を知つた周は人を頼んで説得させたが効き目はなかつた。老板は山東路聯合會の職員を務め、けつして物分かりの悪い人物ではなかつたが、店の会計係「帳房先生」に惑わされて学徒の夜学を禁じたのである。

われわれが金を費やし、精力を耗すことを厭わずに義務学校をやるのは、失学の青年を救済し、常識を備えた国民に育てるためである。商店の学徒も以前の失学を恨み、毎晩、一、二時間を割いて勉強にやってくる。店の仕事に支障はないし、悪習に染まることもない、半工半読の方法である。将来、学徒が学問を身につければ、かれ自身にとってプラスになるのはもちろん、店にとつても害になるはずはない。帳房先生はなぜ老板の前で学徒の勉強を阻止したのか。まさかかれらに学問ができれば自分の面子が保てなくなるのを恐れてではあるまい。学徒は売身契約書を入れたわけでもないのに、かれらに勉強

を許さないのなら、なにを学ばせようというのか。……君たち、いったいどういう量見なのか、平静になって考えてみなさい。別の事件を激発する「激出別の変故」ようなことになれば、それこそ君らに不利になるのだから。

この前後（六期の発行は一九二〇年一月三〇日となっている）、周劍雲が店員の組織・工商友誼会の結成に積極的にかかわっていたことはすでに述べた。そこでかれは教育を主体にした会の運営を主張し、「激烈な手段は最後の最後に至らねば用いない」（四六九頁）と説いていたのであるが、「別の事件を激発する」とは五四運動後、頻発していた待遇改善をめぐる商店員の争議に類するものを想定していたのであろう。かれも商店主たちが「店事を重しと為し、求学を軽しと為し」「十に七、八は学徒の読書を許さない」という現実は承知しており、ことながら店主や「帳房先生」の個人的性癖・好悪の問題でないことも理解していたはずである。しかし、かれは「最後の最後」を口にはしながら、絶対にその到来を認めようとしなかった。あくまでも商店主・資本家の善意——それが打算上も有利だとする——に頼ろうとしていたのである。

工商友誼会の職員だった陳鼎元は植字工であったが、賭博に大負けした工頭の虫のいどころのせいで、夜勤に回され、夜学に通えなくなった。賃金の奴隷も同様の労働者にどうやったら教育を受けさせられるのか（「どうしたら働く者に教育をうけさせられるのか？」『解放画報』一〇期 通信）という訴えに、かれが答えられるのは、やはり「たくさん義務学校——基金の充足した義務学校で、托鉢をして支えるような義務学校ではない——を作るしかない」ということであった。

大多数の労働者はその日その日がやっとの暮らして、買春や博打にうつつを抜かすどころでなく、教育を受けることも話にならない。現在、労働を尊重すべきことを知っている人は、かれらにむかって「劳工神聖」を叫べば、それで互助の義務を尽くしたとしているが、こうしたリップサービス「口恵」だけで実の伴わないやり方は有害無益である。第一歩は欧州の労働者がすでにかち取っている権利——労働八時間・休息八時間——を資本家に対して要求し、工人の精力をあまり消耗させず、賃金も労働に相応したものとさせることである「労値能夠相等」。然るのち、また資本家に義務学校を経営する——教育八時間——よう要求する。労働者がかもし勉強したがいなら、強制「強迫」教育をおこない、人品・人格・人権など

種々の道理を説いて聴かせるようにする。そうなれば社会は強制力をもって、一切の人民に対し、職業の大小を分かつず、人格のある人を尊重し不道徳な人を攻撃する。労働者が勉強して道理を弁えれば、けつして醉生夢死、自ら卑下するようなことはなくなる。資本家がもし隠患を消滅させることを希望するなら、できるだけ早く実行すべきであり、労働者が幸福を享受することを希望するならできるだけ早く要求すべきであり、われわれが社会の安寧を希望するならできるだけ早く提唱するべきである。

もう一つ例をあげよう。製糸工場「繰絲廠」に入ってくる純真な少女工が悪い環境に染まって、たちまち墮落していくのを見るに忍びぬという訴えに、周剣雲は次のように答える（「工廠女工の環境問題・汪頌閣に答える」『解放画報』一八期 通信）。

工場環境の劣悪さは女子のみならず、男子にとっても同様である。男子も工場に入るといつのまにか同化してしまうもので、女子だけがどうして免れることができよう。男子の同化は工場の罪悪であるが、女子の同化は男子の罪悪である。君の言うとおり「朱に交われば赤くなる」のである。君は善良な女子が人格的に墮落していくのを見るに忍びず、落し穴に誘い込むような劣悪な環境を憎んでいるが、この鍵は誰の手に握られているか気が付いているだろうか。私は環境を改善して無知な男女労働者を救うのは全て資本家自身の自覚にかかっていると思う。資本家がもし良心の不安を覚え、労働時間の短縮・労働者の賃金の増加・労働者の待遇改善を行ない、工場の管理に力を注ぎ、補習学校をつくり、人々に相当の教育を受けさせれば、かれらとて人であり石ではないのだから、どうして喜んで教えるを受けぬ道理があるうか。如何せん、一般の資本家は金儲けにしか目はなく、労働者の死活はかまわない。ひとたび罷工の声を聞けば激怒して弾圧する。羞恥は事小、餓死は事大、もし団結が堅くなければ資本家に敗けてしまう。君は工場に勤務していて労働者を可哀そうに思うのか。資本家が自覚しなければ工場環境問題はますます悪くなるだけである。根本的解決には責めを負うべき人がおり、私は労働者を責めるに忍びず、ましてや女工を責めるには忍びない。

周剣雲が中国の近代化をブルジョワ改良主義に求めていたことは、説明するまでもあるまい。商店主にとって学徒の勉学を奨

励するほうが、長い目で見て有利であり、資本家にとって労働者の処遇を改善し、教育を進め、質のよい労働力を確保することが、実は長期の利益を保障するのだと言う。それを実行するイニシアティブも商店主・資本家の側に期待するのみで、学徒・労働者がいかに当面する困難に立ちむかうべきか、具体的な助言は与えることをしないし、またできもしなかった。もつとも、それらはいずれも「読者論壇」「通信」の投稿に触発された問題で、かれ自身が進んで採りあげたテーマではなかったのであるが。女性が男性と同等の学問を修め、経済的自立を達成し、男女平等の厳格な一夫一婦制の新家族のなかで婦女解放を実現しようという、かれの呼びかけも無産・無識の下層の女性、たとえば女工などを対象としたものではなかった。焦点は当然進学の可能な中産階級に絞られていたのである。

しかし、「女性↓高等教育↓解放」の図式に根本的な再検討を迫る問題が周劍雲のもとに持ちこまれた。許婚者がアメリカ留学帰りの青年に誘惑されたという——当初かれはそう理解した——訴えが届いたのである。かれは投書そのものは掲載を見合わせ、相手の林某を社会的に糾弾するよう勧めるとともに、「あなたの未婚の夫人が一時、だまされて過ちを犯したとしても、今は後悔しているのであれば、彼女が教育を受けておらず、しっかりした考えのなかつたことを考慮してあげ、その過失を指摘するとともに将来を励ましてやるべきです。これ以上、彼女を辱めて自殺に追い込むようなことがあつてはなりません」と答えたのであつた（「隱痛 天津のC・T・C先生に答える」『解放画報』八期 通信）。高等教育を受けた女性は立派な人格を備え、主体性を持ち、墮落するはずがないというのが、かれの持論だつたのである。⁽⁹⁾

ところがなんと、その女性は無教育どころか天津でも有名なミッションスクールの出身で、夫の目を盗むため、情夫と英文で「情書」のやりとりをしていたほどだということが判つた。最初の投書から一〇ヵ月後、ふたたび送られてきた手紙と証拠の資料によれば、事態はかれの想像を絶するものであつた。天津の富裕なキリスト教徒C氏は後添いに北京の牧師の娘M女士を迎え一児をなしたが、同じくクリスチャンの林某（アメリカに留学しマスターの学位をもつ）は教会の仕事を口実にC家に入りし、M女士と密通したのである。後で判つたことだが、M女士は結婚前、林某の兄をはじめ「ニダース」にのぼる男性と関係があり、

父のL牧師はそれを放置しながら財産に惹かれて娘を二十歳も年上のC氏に嫁がせたのだという。林某もそれを目当てに人妻のM女士を誘惑したのであって、けっして愛情に発した行為ではなかった。C氏に離婚されたM女士の再婚相手が林某でなかったことでも、それは証明されている。

周劍雲は独自におこなった調査、聞き合わせの結果も加えて（C氏は教会学校関係など各方面に同様の書簡・資料を送付していた）『解放画報』一七・一八期に計五六頁にのぼる「特載」を組んだ。かれは関係者全員がキリスト教徒であることから、まず父親たるL牧師の責任を問い「キリスト教がかかる牧師を容認するなら、私も『非宗教大同盟』（世界キリスト教学生大会が北京で開催されることに反対して、当時、中共黨員らが提唱していた——引用者）に加入したい」としたうえで、他の諸宗教と同じくキリスト教にも女性に対する軽視・蔑視の思想があることを丹念に検討する。しかし、かれにとって根本の問題は「教育と道徳」、すなわち「教育を受けた人間はかならず道徳を備えるかどうか」にあった。「近來新出の賣国賊がいずれも高等教育を受けた者である」事實は、その「胎教・母教・家庭教育」をもふくめた教育の方法・内容に問題があったからであり、「これからの人びとに教育を受ければかならず道徳性が身につくようにさせるには、教育方法を改善し、社会制度を改革し、経済組織を改造すべきであって、これこそ根本解決『正本清源』の对症良剤である」と、それまでの教育万能の主張を一步後退させざるをえなかった。社会制度・経済制度の改変——それは当時、社会革命と同義であった——を少なくとも配合薬として承認せねばならなかったのである。

そこでかれは怒りをミッシェンスクールに遷す。「L牧師の行為を細察すればM女士の胎教・母教・家庭教育がすべて不完全だったことが判るし、彼女の入った某女塾はまた有名な貴族学校——玩弄物製造所であったのだ。卒業後、父母が彼女を放任し、環境が彼女を鎔化し、悪魔が彼女を誘惑する。いくら高等教育を受けていても墮落せずにおられようか」。そもそも教会経営の学校の「大半は中国の民性に合わない」。「教会学校は中国人を英国人あるいは米国人に仕立てようと、中国文（の教育）にはまったく注意を払わない。……そのため学生たちは中国および中国人を嫌悪し、同時に自分が中国人であることを否認して中国

人にたいしても外国語を話し、外国文で書こうとするにいたる」と、「教育の原理に反し、時代の潮流に背く」そのありようを強く批判するのである。

周劍雲は教育の階級的民族的性格に踏みこまざるをえないところまできたのであったが、『解放画報』はこの「特載」号をもって突然幕を閉じる。印刷所の失火で八・九両期の原稿が焼けたりしたこともあってつぎつぎと発行が遅れ、民国一〇年一二月付の一八期が実際には一九二二年六月にずれこむなどの事情はあったが、部数もそこその水準を維持していたように思われ、なによりも一八期に大々的に「本報革新予告」を載せ、次号・一九期から頁数、欄数を増やして「内容を革新し面目を一新して読者と相見えん」と公約したばかりだったのである。⁽¹¹⁾ 一期以来の口絵の美人画が、欧米模倣に反対する誌面の主張とは裏腹に、「金のイアリング・ダイヤの指輪・スカート・ハイヒールなどモダンな服飾を身にまとわせ」、流行の宣伝に一役買っているような印象をあたえるという批判にたいして、画家たちに依頼する立場の弱さを弁明しながら、本報の革新にあたっては「意味のない美術画は廃止することに決めている」と答えたのも一七期においてであった（「一読者の美術画にたいする意見 舒渭文先生に答える」）。要するに継続発行に大いに意欲を示しておりながら、実際には一八期を最後に『解放画報』は姿を消したのである。出版社・新民図書館の消息もそれ以後は杳として聞かれなくなった。

その間の具体的な経緯は明らかでないが、この年三月、周劍雲・鄭正秋・鄭鷓鴣が張石川・任矜蘋と明星影片公司を設立し、新たなメディア・映画の制作にうちこみ始めたこととかかわっているのはまちがいない。だが、二年有余取り組んできた『解放画報』を周がどう総括したのか、発行継続の約束の不履行をどう弁明したのか、いまのところ手がかりとなる資料をもたない。「これまでの一八期中、投稿を採用した男子は九一人、女子は僅かに一三人。女性の方々「諸姑姉妹」で婦女問題を重要と考え、男子が勝手「単独」に進めて自身は受け身の立場にあることに甘んじられぬ方は、どうか大いにご援助を賜りたい」と「本報革新予告」は訴えたが、五期の「本報啓事」（前出）で嘆いた事態に結局変化はなかったのである。「予告」で「特約撰述員」として公告した二九人に一人の女性も含まれていないことが、それを端的に示している。

全一八期を通じて名前の出た執筆者（画稿を除く）は周劍雲自身を除いて一二二人、うち一回きりの寄稿者（通信をふくむ）は七五人、三回以上は三一人、五回以上は一六人、同じ時期、上海には女性解放を提唱する『新婦女』（一九二〇年一月—二二年五月）、『婦女声』（一九二二年二月—二三年六月）、『婦女評論』（『民国日報』副刊 一九二二年八月—二三年八月）などの雑誌・新聞があったが、『解放画報』の執筆者はそれらとほとんど重ならない。⁽¹²⁾「中国貧弱の原因、罪惡の根源は、国家でもなく社会でもなく、実に家庭の内・個人の中にある」と⁽¹³⁾とらえ、「修身・齊家・治国・平天下」の論理で教育救国を高唱する立場からは、⁽¹⁴⁾高遠かつ非現実的と見えた新思想家グループ・女権運動家を、むしろ周劍雲のほうから敬遠したのではなからうか。かれが『解放画報』で主として依拠したのは新劇運動以来の同志（鄭正秋・徐卓呆・楊塵因ら）、五四運動のなかで交わりをむすんだ新しい友人（顧肯夫・潘公展・任矜蘋・沈求己・谷劍塵・嚴慎予ら）および投稿者のなかから選んだ知識青年であったとい⁽¹⁵⁾てよい。

四 時代に服務せよ

『解放画報』にやや遅れて、新民図書館の發起人の一人施済群は雑誌『新声』を創刊し（一九二二年一月）、新民図書館から発売した。最初は「思潮」欄を設け、呉稚暉・沈玄盧・邵力子・景梅九・戴季陶・廖仲愷など錚々たる人びとに嚴慎予（浙江一師卒業後、山東路義務夜校の教員となった人物⁽¹⁾）などの新進を加えて、新思想の論陣を張らせたが、だんだんと尻すぼみになり、第四期に「国恥特刊」を組んだ後は、「思潮」欄そのものが無くなってしまった。以後は旧派文人、いわゆる鴛鴦胡蝶派の文芸雑誌となり、二二年六月付けの第一〇期で終刊して、施済群は世界書局の『紅雜誌』の編輯に転じたのであるが、⁽²⁾第五期（二二年九月）から新たに「影戲」すなわち映画欄を開いたのが注目される。施済群はその「弁言」に言う。

影戲もまた社会教育の一たり。楽しみ観る者の衆く、人を感じしむること⁽³⁾綦だ速やかなるをもつて、欧美諸国その利弊を

習知し勢いに因つてこれを導き遂に奇功を収む。良に影片の製各おの旨趣あるをもつて、如えば軍事片は人の愛国心を動かし、冒険片は人の堅忍の気を作り、愛情片は纏綿悱惻男女の至性を尽くし、偵探片は魑魅魍魎社会の罪惡を暴く。乃ち羅克・卓別林の輩に至りては突梯滑稽を以て人の嘻笑を博し、また職業に勞れし者のためにその困憊を蘇らすに足る。刻畫既に工みなれば觀感自ずから速やかに、収效の烈なること固よりそれ宜なり。吾国の影戲院あるや殆ど且に廿年、比歳勢力日に張り推被寢く広し。文人・学士・婦女・孺子より下は委巷の小夫に至るまで、浸浸として樂道せざる靡し。然れどもその映演の片大都是歐美より来たり、片中中文の説明書なく、觀る者これに対して往々瞠目して解する莫し。益してや歐米の民情風俗中土と迥かに殊なるをもつて、觀る者その義を察せず、時に扞格の病あり。晩近わが国の人士また自ら影片を攝る者あるも、然も程度の幼稚なるは諱言すべきなく、これを舶来の片に較ぶれば、なお相形見絀するを覚え識者これを憾む。本雜誌は時世の要求に応じ、特に第五期より起し、叢話の尾に影戲の一欄を添闢す。その旨を約言するに蓋し三あり。一はもつて歐美著名の影片を紹介し閱者をしてその旨趣に洞澈せしめ、一はもつて外来の影片を監督し社会に害あるものをして能く躰入すること無からしめ、一はもつて国人の製片者を奨励しその進歩を導き、その改良を促す。凡そ斯の三端には実に深望あり。力未だ逮ばずと雖も敢えて勉めずんばあらず。邦人君子幸いに教えを賜らんことを。

映画の社会的効用に着目し、とくに外国映画の良莠を區別し、国産映画の發展を期待するという問題意識は明確であるが、実はこれより先、周劍雲もその主編する小報で映画評論を採りあげていたのである。「新声」第四期すなわち前出の「国恥特刊」号に載つた広告によれば、鄭正秋を發行人、新民圖書館を發行部とし「周劍雲先生主任 名流合撰の小日刊」である「春声日報」が一九二二年五月一日に創刊されたが、撰述人として『解放画報』の常連をふくむ旧派文人が名を列ねるなかに、「影戲」担当として顧肯夫・陸潔夫があげられている。顧肯夫は先に紹介したとおり上海学聯いらいの周の友人で、『解放画報』では八・九兩期を除く毎号に「科学常識」を執筆しており（他に訳詩、訳文がある）、おそらく理科系の教師出身ではなかつたらうか。陸潔夫は『画報』にわりあいと新味のある短篇小説を六篇寄稿している人物で出身・職業については詳らかでないが、い

ずれにせよ映画にたいする関心がこのころ急速に高まってきたことを示すものだと見てよからう。「新声」には顧肯夫が当の「影戯」欄に執筆しているほか、周劍雲・鄭鷓鴣も寄稿しており、⁽³⁾かれらが映画について施濟群と同様の問題意識を抱いていたとしても不思議ではない。一九二三年三月、鄭鷓鴣・張石川・鄭正秋・周劍雲・任矜蘋の五人は中国映画史上に大きな足跡を残すことになる明星影片股份有限公司を設立した。「家庭教育及び学校教育の及ばざるところを補う」と、その「組織縁起」がうたったように、周劍雲らは「社会改良」の新たな媒体を映画に求めたのである。⁽⁴⁾

出版事業および「解放画報」の編輯に精力を注ぎながら、周劍雲の新劇にたいする情熱は変ることことがなかった。かれは同報六期に「新舞台の『華奶奶之職業』を評す」を載せ、それまで「四不像（不新不旧不中不外）」の新劇ばかりを掛けてきた劇場・新舞台が、バーナード・ショウ原作・潘家洵訳の「華倫夫人の職業」（『新潮』二巻一期）を翻案して、はじめて本格的な新劇を上演したことを評価した。その主役を務めたのが汪優游（女形）であったが、彼は汪の演技は称賛しながら、汪がそれまで「一方では婦女を玩弄し、一方では自身を婦女の玩弄に供し……『財』『色』の両面でさんざん浮名を流してきた」ことを「最大の罪惡」として責め、また従来「新劇をやるのに『社会教育』などかかわりはない、客が喜びさえすればよいのだ」と放言していたことをとりあげ、汪がこれを機会に改過自新し、「速やかに新潮の洗礼を受け」るよう希望した。汪の演じたヒロインは男性の玩弄物たることを拒否し、「労働を愛し自由を愛し」、自立の道を歩む新女性だったからである。⁽⁵⁾

この劇評を読んだ汪優游が『時事新報』紙上で反論し、居直ったのにたいし、周劍雲は再度七期に「『華奶奶の職業』を評すの余波——汪優游に答える」を書いてその私生活に痛烈な批判を浴びせた。「現在、君のような『出類拔萃』『大名鼎鼎』たる新劇家がおる」以上、自分は「新劇家」と呼ばれたくない、しかし、「私は新劇に対して決して絶望してはいない。私には新劇を研究してはいるが、新劇で生活してはいない同志がいる」と言いきったのである。あるいは当時谷劍塵などが作っていた上海戲劇社（二三年、戲劇協社に発展）が念頭にあったかもしれない。演劇評論に転じて以後のかれは、票友仲間の久記社で活動する一方、⁽⁶⁾学生演劇の指導に力を尽くしていた。一九一八年には復旦大学の教員・学生がつくった「息遊社」の新劇部に参加、一九

年以降は、時には鄭正秋・鄭鶴鵠の協力もえて、中国公学学生聯合會の新劇部、南洋路砮学校、中華工業専門学校、太倉青年俱樂部などの新劇を指導した。

私が参加したいくつかの団体での経験によれば、新劇は氣運に乗ずる趨勢があり、学生演劇こそ不良新劇——すなわちやくざまがいの渡世をし「走江湖、開埠頭」、専ら悪社会の心理に迎合する錢儲け「騙錢」の新劇——を矯正できることを認識した。いくつかの学校は丁重に歓迎会を開いてくれ、私たちも真剣に懇切に演説した。かれらが新劇を創造する精神をもち、不良新劇の毒に中らないようにしてほしいというのがその大意であった。なぜなら芸で暮らしをたてる新劇家は資本家の指揮を受けざるを得ず、資本家が劇場を開いている目的は金錢しかないからである。往々少しく価値のある芝居はちよつと上演しただけで棚上げされてしまい、きわめて俗悪な芝居だけが繰り返し上演される。新舞台が「華奶奶の職業」を掛けたがらず、毎日「活き佛濟公」や「閩瑞生、人を殺して財を奪う」「謀財害命」を演じているのが、なによりの証拠である。資本家の経営する劇場「戲館」が広告できれいごとをならべても「説得嘴響」、事實は掩うべくもない。学生は新劇で生活してはいないのだから、もちろん創造的精神をもつて取り組むべきで、もし芸で飯を食う新劇家の真似をしてお茶を濁すなら、なんと意気地のない話ではないか。

しかし、問題は学生に提供すべき良い脚本のないことである。今、中国でもっとも欠乏しているのは劇作家「編劇人才」であり、十年來見てきたところでは良い新劇はごく少なく、しかも「数種類のやや価値ありとする新劇も、外国の脚本を翻訳したものが多し」のである。自分は芝居は好きだが、作劇の難しさはよく知っており、才能と時間の関係もあつて今までただの一篇も作つたことがない。⁽⁸⁾「同志たちは私に即席「臨時」で芝居を作る「編戲」ことを求めたが、例の新劇家連の演じた芝居をやることに賛成せず、また自分で「急就章」を作ること肯んじないとあつては、芝居の演じようがなくなった」という。周劍雲は新しい脚本の研究が共同の課題であるとしつつ、かれが六年前に歐陽予倩と共演した「神聖之愛」を記憶をたどつて再構成し、学生演劇のために提供した（『解放画報』八期・一一期に掲載）。その梗概をまで紹介する紙幅はないが、「自由恋愛」を誤解して

いる青年男女が多いのに鑑み、真の愛情とは何かを明らかにすることも、かれのもう一つの趣旨であった。

汪優游批判と学生演劇への入れこみは、周劍雲が自己の才能の限界を自覚しつつも、なお新劇改良への情熱を燃やし続けていたことを示している。しかし、基本的に「旧派文人」に属し、⁽⁹⁾ 修心・齊家の論理から離れられなかったかれは、主観的には「旧社会の悪習慣を一つひとつ解放し、真の『徳謨謨克拉西』主義（デモクラシー）を達成するの⁽¹⁰⁾」に新劇を貢献させようと模索しつつ、とりあえずは五四以前の他人の旧作を借りるしか方途はなかった。ある意味で袋小路に陥っていたといってもよいであろう。映画づくりの話はそこへ持ち込まれたのである。

さて、張石川は第一次世界大戦勃発のため亜細亜影戲公司がつぶれた後、経営三を扶けて民鳴社をとりしきり、『新劇雑誌』を発行したりしていたが、⁽¹¹⁾ もう一人の舅父経潤三（経営三の兄）が、一九一五年、「新世界」遊芸場を建ててからはもっぱらその下で奔走した。そのかたわら一六年に友人と幻仙影片公司をつくって映画を撮るが資本が続かずに失敗し、さらに経潤三の死後、その共同経営者だった黄楚九が一八年、別に「大世界」遊樂場を始めたため、経家は競争に破れて「新世界」を手放さざるをえなくなった。しかし、張石川は後にその岳父となる富商何泳昌に引立てられ、二〇年前後の株式ブームのなかで「大同交易所」を設立して投機に乗り出そうとするが、途中で気が変わり、何からもらった資本を転用して、三たび映画事業に挑むことになったのだという。⁽¹²⁾ かれは鄭正秋と協同し周劍雲・鄭鷓鴣を語らい、さらに任矜蘋をも加え、五人で一万元ほどの資金を工面して明星影片公司を発足させたのである。⁽¹³⁾

その前年から映画事業はブームを迎えていた。施済群が指摘したように外国映画、とくにアメリカものが氾濫して人びとを呼び込んでいたなかで、国産映画も便乗しようと幾つもの映画会社が上海で名乗りを上げていた。⁽¹⁴⁾ 明星がそれらとひと味違っていたのは、新劇の役者に依存する先行の各会社と異なり、まず俳優・要員の教育・訓練のために修学期限六カ月の影戲学校を設けたことだった。鄭正秋・鄭鷓鴣・周劍雲・谷劍塵らが教員となり、ずぶの素人をもふくめて男女の「學員」五、六〇人を養成したという。その上でいよいよ実地訓練もかねて映画製作にかかったが、張石川が監督、鄭正秋が「編劇」、鄭鷓鴣が演技指導を

担当した。手っ取り早い金儲けを狙う張石川と、社会の教化に貢献する「長編正劇」を送り出すべしとする鄭正秋とのあいだに対立はあったものの、好人物の鄭は結局張に押し切られてドタバタ喜劇やきわもの時事劇の製作から手を付けたのである。それが興行的にいずれも失敗に終わって、ようやく家庭倫理劇をという鄭の主張が通り、長編劇映画「孤児救祖記」の製作に公司の命運をかけた。

この映画は完成に一年を要したというが、この間資金も底をつき、関係者はやりくりで頭を悩ませた。裏方として経営の衝にあたった周劍雲も新婚早々の夫人から衣服や宝飾を借りて質に入れ、フィルムの購入や必要な支出に当てるなどたいへんな苦勞をしたという⁽¹⁵⁾。明星の発足と同じ二二年、陸潔・顧肯夫らが中国最初の映画専門誌「影戲雜誌」を創刊し、二期発行したところで行きづまったのを明星が買いとり、顧肯夫（後に明星の「常年法律顧問」となった）に第三期を発行させたのはかれのアイデアであったろうが、それきりで停刊をよぎなくされたというのも、金繰りがつかなかったせいかもしれない⁽¹⁶⁾。映画事業に全力を傾注しはじめた周劍雲が「解放画報」・新民図書館を兼顧できなくなった事情もわかるような気がする。

「孤児救祖記」は一九二三年一二月に完成した。試写会の翌日、「某南洋の（華僑の）映画配給業者「片商」が八千元から九千元という額をはずみ」放映権を買い取ったのを手始めに、「營業収入は目論みの数倍を超え」、明星影片公司是絶境を脱したのみか、一挙に飛躍のチャンスをつかんだ。教育救国の理念を縦糸に富豪の家の資産相続をめぐる波瀾を横糸に織りこんだ、この家庭倫理劇は中国映画史上の金字塔としてあまりにも有名である。「すこぶる教育的意義に富むだけでなく、演技・撮影・照明・編輯等すべてにわたって」当時としては「驚くべき成功を収め」、「国産映画の局面を切り開き、国産映画の基礎を打ち建てた」と評される作品となったのである⁽¹⁷⁾。

明星の成功に刺激されて上海には映画会社が簇生した。一時は大小四・五十社が乱立し、作品を一本出ただけで姿を消すものも多く「一片公司」の称さえ生まれた。そのなかで明星は着々と地歩を固め、中国最大の映画会社にのし上がっていった⁽¹⁸⁾。張石川が総経理として監督を兼ね製作部門を担当し、鄭正秋は協理として「編劇」の責任と持つとともに監督をも兼ね、周劍雲は

經理として渉外・契約等にあたるなど、内部の分業体制も確立してきた。ただ主演俳優として活躍していた鄭鶴鳴は、一九二五年四月、四五歳で急逝した。その棺を曳く者のなかに、映画演劇関係者は当然のこととして「惠民義務学校全体学生」「救国十人団聯合會・少年宣講団各代表」のあったことが故人の社会活動を偲ばせるものであった。⁽¹⁹⁾任矜蘋は他に専業をもつためか、経営には深くはかかわらず、明星の宣伝機構として創設した晨社を主持していたが、二五年、初めて自らメガフォンを取った「新人的家庭」で紛糾を起こし、二六年、別に新人影片公司を設立して明星から離脱した。

五人の創設者のうち二人が欠け、張石川・鄭正秋・周劍雲はいっしか明星の三巨頭と称されるようになった。「戯劇の最高のものは人生を創造する能力を持たねばならず、やや下がっても社会を改正する意義を含まねばならず、最小限度でも社会を批判する性質を持たねばならぬ」⁽²⁰⁾とする立場から、鄭正秋は旧道德の非人間性を暴露し、不幸な女性の境遇に同情する多くの社会派映画を送り出した。しかし、他方では張石川の商業主義に引きずられて「紅蓮寺焼き討ち」――一八集のような作品にも手を染め、おりからの神怪武俠映画の氾濫に火をつけ油を注ぐような役割をもはたしたのである。周劍雲は営業の総責任者として辣腕をふるった。激しい競争のなかで有力六社を糾合して配給会社・六合影片發行公司を結成し、⁽²¹⁾国産映画の振興・粗製濫造反対を旗印に自ら出馬して国内はもちろん南洋の業者とも連絡をつけ、一大配給網を組織した。明星の支配への反感から六合が解体した後、華威貿易公司与改名し、他社の作品をも取り扱って明星の制覇におおいに貢献したという。

一九二五年秋、明星は洪深（一八九四―一九五五）を編劇顧問として迎えた。アメリカで演劇学を専攻し、二二年春に帰国して以来、話劇（日本でいう新劇）の開拓者として旋風をまき起したが、「教育を普及させ国民の程度を高める」「文明の利器」としての映画につとに着目していた人物である。⁽²²⁾かれの加入は三巨頭ともが「土生土長」・自学自習の映画人であったなかで、明星に新風を吹きこむものだった。しかし、二八年以降、それまで超人的な「編劇」能力を誇っていた鄭正秋の健康の衰えと製作本数のいっそうの増加に劇本の供給が追い付かず、周劍雲が奔走して鴛鴦胡蝶派の文人たちを多く引きいれざるを得なくなった。とどのつまりが張恨水の長編小説『啼笑因縁』の映画化を争って大中華電影社との訴訟合戦となり、明星はたいへんな出費を強

いられた。相手側に暗黒街の大物黄金栄がついているというので、こちらは同じく杜月笙を頼むことになり、三巨頭うち揃って杜公館に出むきその門下に入ったのである。事件は杜と黄との手打ちで明星に軍配があがったが、杜に託した解決金だけでも一〇万元、まさに惨勝であっただけでなく、映画『啼笑因縁』全六集の封切がちょうど満州事変（九・一八）、上海事変（一・二八）とぶつかり、この「公子多情佳人薄命調」の映画など大衆に見向きもされなかった。おりからアメリカからトーキー撮影設備を導入するために莫大な資金を投入していたことも重なって、明星は破産の危機に直面した。

一九三二年の五月、明星の三巨頭は洪深の進言によって方向転換をおこなうこととし、周劍雲が左翼作家聯盟の錢杏邨（阿英）に依頼して夏衍と連絡をつけた。錢杏邨は『解放画報』の常連の寄稿者で、周の故郷合肥で中学教師をしていたこともあってか、二人はとくに親密だった。六合影片發行公司を作ったさい、周劍雲が当時郷里の蕪湖で活動していた錢杏邨を「合作者」として登記したということからも、かれがこの若い友人に特別の配慮をしていたことがうかがえる。⁽²³⁾阿英は二六年すでに中共に入党していたが、そこまでの事情は知らずとも、かれが左翼文化運動の幹部の一人だとは先刻承知していたはずである。周劍雲が阿英に依頼したのは当然のことであった。経緯は夏衍の自伝『懶尋旧夢録』（三聯書店 一九八五）に詳しいので割愛するが、結局阿英・夏衍・鄭伯奇の三人が編劇顧問としてそれぞれ変名で明星に入り、進歩派の監督たちと協力して階級性・社会性に富む作品を次ぎつぎに送り出すことになったのである。

これに刺激を受けて鄭正秋の作品も階級的観点を取り入れたものに変わった。かれの脚本・監督により、貧富あい異なる環境に育った双子の姉妹が、かたや名家の令嬢、かたやその家の下婢となって巡りあう、数奇な運命と残酷な社会的現実を描いた「姉妹花」（トーキー）は、一九三四年二月、春節を期して封切られ、営業収入二〇万元という空前の大ヒットを飛ばして、ふたたび明星の危機を救った。その前年、鄭正秋はPR誌『明星』一卷一期に「前進への道を求めて」「如何走上前進之路」を書いてこう述べた。⁽²⁴⁾

偉大な五四運動があつてこそ學術思想、いっさいの文芸作品の大転換が激発された。すなわちいかなる事業でも環境とともに

に進退することを免れられぬことだが、映画はどうか。もちろん例外ではありえない。……中国がまさに生死存亡の岐路にある時期、我われの面前に横たわるのはただ二すじの道、歩むほどに光明のます生の道と歩むほどに狭まる死の道と。生の道を歩むとは時代に向かつて前進することであり、死の道を歩むとは時代に背いて後退することである。映画は時代の先駆たる責任を負う——私は中国の映画界が「三反主義」のスローガンを——すなわち反帝——反資——反封を叫ぶよう希望する。

鄭正秋の主張はそのまま周剣雲の主張であったと見てよい（二人は三三年一〇月、世界反帝大会代表歓迎のパーティーにうちそろって参加している）。明星が先鞭をつけたことで各社もこれに追随し、話劇・音楽・美術界の多くの進歩人士が映画界に入り、進歩的左翼的映画が次ぎつぎと送り出された。いわゆる「文化围剿」を映画界から突き崩された国民党当局がこれを放置するはずはない。強化された検閲と駆け引きするのは周剣雲の受け持ちである。時に上海市の教育局長（後に社会局長をも兼任）の座にあり、文化界への統制の権限を握っていたのは、周のかつての友人・潘公展その人であった。その後の潘は進歩的ジャーナリストとして鳴らしていたが、二七年一月、陳布雷とともに蔣介石に招かれてその幕下に投じて以来、C・C系の大物として羽振りをきかせていたのである。周剣雲は彼に明星の株を贈り、董事（重役）に迎え、その要求する人事（編劇顧問）を受け入れるなど懐柔策を講じながら、極力明星への風当たりを避けてきたが、国民政府の圧力はいよいよ強まり、三三年一月には左翼映画の拠点の一つ、田漢らのかかわっていた芸華公司が中国映画界劇共同志会を名乗る一群の暴徒によって打ち壊しを受けるという事件が起きた。明星では張石川が真っ先に動揺した。阿英・夏衍・鄭伯奇らも三四年一月、退社を余儀なくされたが、鄭正秋・周剣雲らとの友好関係には変わりはなかった。

一九三五年二月、周剣雲は夫人を伴い、明星の主演女優で銀幕の皇后とよばれた胡蝶とともにモスクワでの世界映画祭に出席するため上海を発った。この映画祭では聯華公司出品の「漁光曲」が中国映画としては最初に国際的な「榮譽獎」をえたが、これらの提げていった「姉妹花」「春蚕」などは会期に間に合わず、終了後に特別公開されるに止まった。しかし、かれらはソ連

からの帰途、ドイツ・フランス・イギリス・スイス・イタリアを回り、各国の映画界と交流し、中国人の作った映画を初めてヨーロッパに紹介するという成果を上げて七月に帰国した。⁽²⁷⁾ そのさいは病を押して上海埠頭に出迎えた鄭正秋だったが、周と訪欧の収穫を語りあう間もなく八日後の一九三五年七月一六日、四八歳の生涯を閉じねばならなかった。過労とついに絶つことのできなかつたアヘンとが、その生命を縮めたのである。

明星の三巨頭では周劍雲と鄭正秋が左派、張石川が右派だとは定評のあるところであつた。一九三六年一月、歐陽予倩らは上海電影界救国会を結成し、「領土主権の保全、失地の回復、愛国運動の保護および集会・結社・言論・出版と映画製作の自由」を要求したが、発起人六人の内、監督・俳優などいわゆる映画工作者でないのは周劍雲ただ一人であつた。⁽²⁸⁾ 鄭正秋亡き後、張石川の国民党への迎合・大衆阿諛の商業主義路線が三たび行き詰まつた一九三六年春、周はふたたび左派人士との合作を回復し、歐陽予倩・阿英・鄭伯奇を編劇顧問にすえ、前年末倒産した左翼映画人の拠点・電通影片会社のスタッフをおおぜい迎え入れた。七月一日、明星は大幅な改組をおこない「革新宣言」を発表した。「時代のために服務せよ」を基本方針にかけ、「民族のために、また自身の事業のために、われわれは即刻国防映画の製作に従事する準備を整える」。「脚本の題材および思想は時代に服務することができ、かつ充分な社会的価値を有することを第一義とし」、「観衆を毒する、糜爛的な、麻薬的ないわゆる『純粹娛樂』の傾向を絶対に排除する」と表明したのである。以後の明星公司是社内右派と抗いつつ面目を一新し、国民党の検閲・圧迫をかいくぐつて抗日を宣伝し、社会の暗黒を暴露する優れた映画を次つぎに発表し、大衆の歓迎を受けた。明星は三たび経営の危機を脱し、かつ後に新中国の映画界を担うことになる優秀なスタッフを養成していったのである。

しかし、三七年八月、日中戦争の拡大により明星の社屋および撮影所は日本軍に占拠・破壊され、ついに明星影片公司はその一五年の光榮ある歴史を閉じねばならなかつた。洪深たちは上海を離れて抗日救亡の演劇活動に従事したが、張石川・周劍雲はそれぞれに持ち出せるかぎりの器材を租界に移し、以後は「孤島」上海で別々に映画づくりの夢を追つた。張石川は国華影片公司に監督として身を寄せ、周劍雲は四〇年六月、南洋の華僑映画商と合資して金星影片公司を起し、中共黨員于伶の脚本で佳作

「花濺涙」をプロデュースした。監督は張石川と鄭小秋（正秋の子）、この時期、有害無益の映画ばかり濫造していた張にとつては唯一の憂国憂民・愛国抵抗の積極的意義をもつ作品であったという。⁽³⁰⁾一九四二年一月、日本は太平洋戦争に突入し「孤島」は消滅した。汪精衛政権の傘下で映画界は再編され、国華も金星も中華聯合製片会社に吸収され、次いで日本人川喜田長政（副董事長）が実権を握る中華電影聯合会社に統合された。張石川はそこで製作「製片」部長の要職にあり、そのため日本の降伏後は他の一六、七人の映画人とともに漢奸罪で告発されるのだが、周劍雲の当時の状況はまったく明らかでない。

一九四五年のおそらく八・一五以後、周劍雲は香港に往き、四六年、大中華影業公司に加入した。⁽³¹⁾しかし、中華人民共和國成立後、かれは「映画界からは姿を消し、上海で老いを養っていたが、六〇年代の末に世を去った」という。解放後、同じく上海で病床にあった張石川のもとには上海電影製片廠の中共党委が見舞いに人を派遣し、まだ仕事ができるかどうか尋ねさせ、おおいにかれを感激させたというが、⁽³²⁾新中国は周劍雲をどのように遇したのか。監督や俳優・技術者などいわゆる映画工作者ならともかく、経営者にはおそらく用はなかつたのであろう。

企業家としてのかれの奮闘ぶりについては、これまでも断片的にふれてきたが、最後に明星の大スター女優胡蝶の回顧を紹介しておこう。⁽³⁴⁾

明星が成立するや周劍雲は發行部主任に任じた。周は書生ではあったが、企業家精神が旺盛で市場の開拓に注意して、上海だけに止まらず南京・北平・天津・漢口・広州・重慶・昆明等の大都市（シンガポールなどにも——引用者）に前後して發行支所を設置し、明星公司の作品を優先的に各地で上映できるようにさせた。明星の映画が全国的に影響力をもち、俳優が全国的に知名人になれたのは周劍雲の抹殺できぬ功績である。

明星の業務が拡大すると周劍雲はまた画策して華威貿易總公司を組織し、中外各大公司の出す映画を代理發行し、四達通トーキー映写機、華威風電氣蓄音機を作つて国内の各大映画館に取り付けさせ、さらに明星半月刊・明星月報・明星公司男女紅星紀念冊・プロマイド「簽名照片」等を發行した。多角経営「広闊財源」の方面では、周劍雲は企業家の才能があつた

と言うべきであり、そのため「明星公司の保険櫃」の外号があった。明星公司同人のかれにたいする心服ぶりを見ることが出来る。……明星公司の発展の過程にも若干の曲折があった。初期は作品が悪くてあやふく停業の危機に瀕したし、後にも何回か困難に遭遇したが、周剣雲という円滑周到な理財家・外交家のおかげで切り抜けていったのである。抗戦爆発前の二年間、情勢の変化によって各業種とも不景気で映画市場も例外ではなかった。各公司とも給料の遅配欠配があたり前のようになり、明星も同様であった。ある日の午前、激昂した人びとは発行部に押しかけ給料の支給を求めて座りこんだ。ストライキに発展することは必至と思えたが、周の力量はたいしたもので平然として応対し、見る間に風暴は収まり全て正常に復した。それ以後、周剣雲にはまた「狐狸」という綽号が増えた。

かれがもつぱら経営の衝にあたったのは、三巨頭の分業という逼られた事情によるもので自ら望んだ道ではなかったように思われる。三三年以前に『影戲概論』なる著作のあったこと、⁽³⁵⁾初期には張石川と鄭正秋の「劇本」検討の場にときおり参加していたことなどから、当初は新劇改良運動の延長線上に自己の任務を設定していたのではあるまいか。『解放画報』続刊へ表明した意欲もけつして掛け値はなかったはずである。しかし、まさに当時のヴェンチャービジネスだった映画は片手間でできるような仕事ではなかった。社会教育の新たなメディアとする初心を資本の競争場裏で貫こうとすればなおさらである。『商業実用全書』の編輯が識をなしたのか、周剣雲は企業家となることを余儀なくされ、またそれによってその隠れた資質を存分に開花させもしたのである。そのなかで新劇運動の清議派・愛国主義者から、五四運動期のブルジョアの啓蒙家・フェミニストとしての活動を経て、ついにはときに杜月笙を担ぎ、ときに潘公展に鼻薬を臭がすこともあえてする老練な経営者に変身しながら、救亡・救国の立場・目標を見失うことはいになかった。「時代に服務」することはその生涯の総括であったと言つてよからう。

むすび

中国映画史上における周剣雲の現在の評価は高い。「先生は中国映画事業の孜孜たる開拓者であり、才幹の卓越した映画事業家であった。かれは半生の心血を注いで明星影片公司という畑を耕し、中華民族の新興映画事業の発展のために苦難のなかつたまぬ努力をされた。明星公司の生んだ優秀な作品のいくつかは今日いまだに国内外で観衆の高い評価を受けている。映画の出演者・製作スタッフを表示する字幕に周剣雲の名を見ることはないが、かれの打ち建てた功績は永遠に中国映画史の重要な一頁を飾るであろう」と¹。しかし、前述のようにその没年すら定かでないことから推測して、かれの「解放後」の境遇はけつしてこうした評価に見合うものでなかった。新中国が国民党の旧高官にたいしてしたように、せめて文史館にでも迎えて回憶録をまとめさせていてくれれば、映画史はもちろん一〇年代の新劇運動から五四運動の時期にかけても貴重な証言をえられたであろうに、なぜそうした処遇さえ行なわれなかったのであろうか。文化部副部長にまでなった夏衍を筆頭に洪深・阿英その他かれの功績を熟知する人びとは人民共和国の文化界にはたくさんいたはずであったのに。「解放前」の映画界関係者の多くが文化大革命中に江青のために迫害を受けたことは周知のとおりだが、周剣雲にはその形跡もない。ほとんど忘れ去られていた感じである。剣雲が本名であるはずはなく号か筆名にちがいないが、「中国電影家列伝」「周剣雲」の執筆者はもはやその原名を確かめる術をすらもたなかったようである。

ともあれ、映画史上でのかれの功績が実は新劇の改良を實踐し、五四運動へ積極的に参加し、婦女解放を提唱した前半生の志と不可分の関係にあることは小論で明らかにできたように思う。社会教育をつうじた救国への貢献が、おそらくかれの一生を貫いた悲願であった。その悲願が鄭正秋・鄭鶴鳴との血盟関係を生み、明星影片公司の設立へつながっていったのである。五四運動はかれの活動と交友の範囲を一挙に拡大し、その思想に新たな地平を開いた。かれは日本軍国主義の侵略に反対し、軍閥の横

行に齒噛みする愛国者から急進的なデモクラットに進む。しかし、上海という「十里洋場」で少年期・青年期を過ごしたかれには革命への道は非現実的に思えた。「私はこどものころ専心読書し、孟軻にたいへん共感したが、やや長じて社会との接触が深まるに及んで、また荀卿の説に根柢があり、孟軻の説は不徹底だと感じた」と述懐するかれは、過渡期の「過渡人」をもって自任しつつ、教育救国の改良路線を提唱する。二年有余にわたって『解放画報』を主宰しつづけた情熱と義務感はなみたいいものではない。

『解放画報』の一七・一八期、かれは教育の階級性・民族性を問題とせざるをえなくなった。教会教育が無国籍の中国人をつくり、婦女を男の高等な玩弄物に仕立てているという現実を突きつけられたのである。教育救国の内容をいやおうなしに問わねばならなくなった時点で、残念ながらかれは映画事業との二者択一を逼られ、『解放画報』の続刊を断念したので、その面での思想の展開を追うことはできない。五卅運動の前後、帝国主義の文化侵略に反対して教会学校の教育権回収運動が全国的に盛り上がったが、論理的にはかれも当然そこへ帰結していったことであろう。五卅といえは周劍雲も鄭正秋もとくに積極的にかかわったことを示す資料はないが、帝国主義との闘いは中国映画の最初からの課題であった。内容的にはなく経営的なのである。

一九二五・二六年、中国映画の隆盛ぶりを見た英米タバコ公司は中国における映画産業の独占を狙い、みずから映画製作に乗り出すとともに、映画館を押さえにかかった。当時、上海の映画館のほとんどが外国人の経営に属し、広州を除いては各大都市も同様の状況にあった。中国人経営の小映画館はわずかに百余館、これが買収されてしまえば国産映画は完全に外国資本の支配下におかれる。「後幸いに五卅抵貨風潮の発生があり、ついで時局の影響（革命軍の発動）もあって」この「トラスト政策」は失敗に終わったのであるが、反帝国主義の大衆運動こそ中国映画産業の保障であることを周劍雲らは骨身にしみて感じたにちがいない。

一九三三年前後のことだが、前述のように明星公司是重大な経済的危機に直面していた。アメリカの匯衆銀洋公司是機に乗じて三〇万円の資金で明星の併呑を謀り、まず一ヵ月「五百両」の高給で周劍雲を「営業顧問」に招くことを餌に、かれに買収契

約への調印を迫った。その厳しい拒絶に遭うと先方は法的手続きに訴えて明星を差し押えると恫喝したが、周劍雲はきっぱりと答えた。「私が公司にいる間は君が我が公司の門をくぐれるとは想いなさるな。たとえ銃一丁弾一発でも残っているかぎり君には屈伏しない。そもそもわが公司にたいする君のあこぎなやりくち「剝削」には腹を据えかねているのだ。こんな紳士式の経済侵略を受け入れるくらいなら、倒産したほうがましだ⁽⁴⁾」。絶体絶命の状況のなかでかれは超人的なねばりを見せ、あらゆる才覚をめぐらして資金をやりくりし、「姉妹花」の大ヒットまでを明星を持ちこたえたという。「反帝・反資・反封」の「三反主義」は、鄭正秋だけでなく周劍雲においても、付け焼刃ではない到達点だったのである。客観的には兩人とも資本家になっていたというのは確かにパラドックスである。「解放」後、周劍雲が人民政府から一顧もされなかった(?)のにはおそらくそれがからんでいよう。たとえば『五四時期期刊紹介』第二集(人民出版社 一九五九)の工商友誼会機関誌『夥友』の解題にはこうある。

「五四」以後、上海には多くの黄色工会が出現した。工商友誼会はそのうちのひとつである。該会の主要な成員は店員労働者であり、次いで中小資本家であった。現在判明しているところでは、該会の発起人であり組織者であったのは店員出身の董理璋で、彼がこの会を組織した目的は店員労働者を利用し、政治投機の資本とするためであった。彼はつねに資本家と密かに結託し、資本家から補助金を受け取り、労働者の裏切り者「工賊」として働いた。このほか国民党政客の費公侠および当時上海の明星電影公司の經理周劍雲もみな該会の会員であった。

これは周劍雲のために冤を叫ばざるをえない。だいいちかれが工商友誼会にかかわった時には明星はまだ成立もしていないし、明星創立の時期にはとくに手を引いている。費公侠だってそのころはまだ「国民党政客」と言われるような身分ではなかった。また、上海共産主義者グループが当初この会におおいに肩入れた事実とどう整合させるのか。その論法でいけば、かれらや後に蒋介石の腹心となった潘公展が中枢にあった上海学聯もいかにさまざまな組織だったということにならないか。

同じく第二集の『解放画報』解題は、筆者が本文ではふれなかった各期の「新聞」欄を「国際的婦女運動と国内の婦女運動の

動態を報道し」「一定の資料的価値あり」とするだけで、「評論」「思潮」などは「中心的内容から見れば『女権の提唱』と一点一滴の改良に熱中しており、婦女運動のなかの多くの問題を提起はしているものの、いずれも革命闘争と労働人民から脱離して論じられているため、引き出された結論も誤っている」と一刀両断である。なによりも三千字に余る解題に周剣雲の名が一回も登場しないというのはどうしたことか。資本家のために樹碑立伝するわけにはいかぬということであつたら、「解放後」のかれの境遇の想像もつこうというものである。

もちろん、これは三〇年も以前のことである。八〇年代以降の中国歴史学界は五四時期の改良主義的運動にも然るべき地位を与えている。初期の中共の労働運動が、澎湃たる教育救国の世論のもとで、例外なしに「平民教育」の看板を掲げて着手されたように、革命的運動もブルジョアの改良運動の裾野の広がりとともに高まっていたのが二〇年代初期の中国の現実であつたとすれば当然である。

小論は冒頭に述べたように、五四運動から二〇年代初期にかけての上海の知識人、それも中級知識人の動態を、周剣雲をつうじて探ろうという問題意識をもつて出発した。上海に出現した教員・ジャーナリスト・作家・演劇人などいわば自由職業のブルジョワジーの実態と役割を説明することを課題としたのであるが、まだまだ満足のいく解答は出し得ていない。ただ、そのなかの少なからざる人びとが新興の映画産業にかかわっていった事実、その一人周剣雲が従来、時流をつかむに敏な識見・胆略をもつた経営者として評価されていなかったものが、実は一九一〇年代らしい社会教育・救国救亡——婦女解放への着目・努力も基本的にはそこから出発している——に一貫した姿勢を保ち続けた人物であり、映画界における業績もその初心と切り離しがたく結びついていることを、いちおうは明らかにできたと自負している。小論が磚を抛って玉を引く役割を果せれば幸甚である。

注

はじめに

(1) 潘公展『学生救国運動全史』(富文書局一九一九年一〇月)九頁、

玲瓏序)。

「潘君自己現在不能算在学生的地位、然他在上海学生運動開始的時候、也同我一樣、代表他學校裏学生的意思、到学生聯合會裏去做事」(「任

(2) 同前一頁、「岑德彰序」「潘君公展是我的老同学。……自從上海學生聯合會成立、我們便一同在內辦事。他是評議部的評議、後來又代表出席全國學生聯合會評議部、現在又担任着日刊繪編輯」。

(3) 張靜廬「在出版界二十年」(一九三八年 上海書店一九八四年再印) 六八頁

(4) 「学生会旧職員維持義校」「民国日報」一九二二・一一・二三、「学生会旧職員關懷義校」同一・二八、「学生会旧職員之季社成立」同一九二二・六・七。

(5) 「商學一致之上海」「民国日報」一九一九・六・六。

(6) 「學生聯合會消息」「民国日報」一九一九・一〇・一七、二二。

(7) 「上海商業公團聯合會評議員姓名錄(四)」「申報」一九一九・六・四、「曹慕管致寧波(紹興の誤り)同郷會函」「民国日報」一九一九・六・一〇。

(8) 進益學校校長張開濟は捷進社代表陳志涓とともに、九畝地工商聯合會を結成するために奔走していたが、一部の商店主に反対されて立腹し、成立を目前に一切を放棄した(九畝地聯合會取消)『民国日報』一九一九・一〇・一五)。教員が主導して商人を組織しようとしたケースが現にあったのである。

(9) 「上海工商友誼會消息」「時報」一九二〇・一一・一六。なお拙著『救国十人団運動の研究』(京都大学人文科学研究所共同研究報告『五四運動の研究』第四函⑬ 同册舎 一九八七) 九八・九九頁ならびに一九二二・一五三頁の注三二・二三・二四を参照。

(10) 前注の拙著一〇一—一〇四頁を参照。

(11) 「策進會各股會議紀」「民国日報」一九二〇・九・三、「國民大會策進會統訊」同九・五など。

第一章

(1) 周劍雲主編『鞠部叢刊』(上海交通路交通図書館 一九一八年一月)「自叙」。なお文末に「中華民國七及十節劍雲時客愛儂園」とあり、

当時かれが愛儂園にあったことを示す。哈同夫人が好んで若手文化人・芸術家のパトロンとなったこと黄警頑「回憶徐悲鴻在上海一段經歷」(『文化史料叢刊』第一輯 一九八〇)を参照。鄭逸梅「書報話旧」(學林出版社 一九八三)に『鞠部叢刊』博采衆長」の項がある。

(2) 以下、啓民社に関する記述は前出『鞠部叢刊』「歌台新史」(啓民社始末記)による。なお、日付は陽曆に直してある。

(3) 「談文明戲」「歐陽予倩全集」(上海文芸出版社 一九九〇年) 第六卷二一五—二二六頁。歐陽予倩の啓民社に関する記述の日付はすべて旧曆によっている。

(4) 「自我演戲以來」「歐陽予倩全集」第六卷一五三頁。「他(周)要和我演(神聖之愛)、他說他最歡喜的那個劇本。……我答應、就和他演了。他的舞台技術比(陸)鏡若自然不及、所以這齣戲不如在上海演得好。歐陽予倩は留日時代から艱難を共にしてきた陸鏡若がその直後に急逝したため、「神聖之愛」の劇本を焼いた。

(5) 張潔「鄭正秋」「民国人物傳」第四卷(中華書局 一九八四年)。「中国電影家列傳」第一集「鄭正秋」では原名を芳沢、号を伯常、本籍を潮州とする。なお、以下の鄭正秋の経歴は互いに入出のあるこの二つの伝を、『鞠部叢刊』「劇學論壇」(新劇経験談(正秋))、「伶工小伝」(鄭正秋伝(劍雲))によって補正しつつ記述した。

(6) 一九一〇年一月二六日から二月七日まで「麗麗所戲言」を二回、「麗麗所伶評」を一回、一二年二月二日から二二年二月五日の間に「鉄血鴛鴦」を二四回連載した。「我自少好親劇。偶以長編劇評投民立日報、蒙于右任先生託親友來聘、竟為我而開劇評一欄。嗣以編輯本部新聞、遂無暇及之」(「新劇経験談」前註参照)と鄭正秋自身が書いてるように、「民立報」に劇評欄は設けられずに終わった。前註所掲の二つの伝は、いずれもかれがこれに先んじて革命派の新聞「民呼報」「民呼報」にも劇評を載せたとするが、誤りである。

(7) かれは李懷霜を自由党総裁に推すことに尽力したという(「新劇経験談」)。

(8) 「編劇」はプロットを立てることで、シナリオを書くことを意味しない。当時、新劇でも脚本・台本を準備することは稀で、劇の粗筋にそってアドリブで進めることが多かったという。欧陽予倩「談文藝」など参照。

(9) 前出「鞠部叢刊」「歌台新史」(「新民之由来与成立」)によると、鄭正秋の食客となった新民公司の演員は一六人、後さらに三人が加わったという。

(10) 欧陽予倩は前出の「談文明戲」で鄭正秋の家庭劇を評してこう言っている。「新民社の家庭戲、多半只追求情節的複雜離奇、追求廉價的舞台效果、許多戲都是看完了不知道他說明什麼。有些戲把罪惡的描写作為正文、到最後生硬地加上些報應懲罰之類的情節、可以說毫無意義。這種戲對於社會非但起不了好的作用、而且很可能起壞的作用、可是當時只求其在台上胡亂博得觀衆哄堂大笑或者硬擠觀衆幾點眼淚、就認為最大的滿足。」「這個劇社可以說一開始不僅沒有宣傳政治的目的、也沒有藝術的目的、只是為了演戲維持一部分人的生活。如果說它也有提高表演藝術的企圖、那是附帶的事」。同時に「正秋還是關心一些政治問題和社會問題的、不管他的見解有多少正確性、他還是愛國的、是有正義感的」とも指摘するが、この文章が一九五七年に書かれたことあつてか、少なくともかれの主觀的立場にたいしては、いささか点が辛すぎるようである。

(11) 「鞠部叢刊」「六年來海上新劇大事記」上(「民鳴新民合併」)。

(12) 「鞠部叢刊」「伶工小伝」(鄭鶴鳴伝(劍雲))、「中國電影年鑑」(中國教育電影協會 一九三四)「明星影片公司十二年經歷史」(「鞠躬尽瘁的鄭鶴鳴先生」)による。なお前者は名を塵とするがおそらく誤植、後者は字を介誠としている。

(13) 周劍雲「鄭鶴鳴伝」、前注参照。

(14) 「救亡声中之賣國奴」(劍雲)、「民日日報」一九一八年七月二二日・一五日。

(15) 「擬辦新民圖書館招股簡章」(「民日日報」一九一八年二月一八日)。

なお、「申報」、「民日日報」一九一九年五月二日の廣告欄に葉風(鄭正秋)署名の「新民圖書館宣言書」を載せている。

第二章

(1) 「民日日報」一九一九年五月六日に載せた廣告「新民圖書館書籍出版露布」を参照。愛國小説と銘うつもの一種をふくむが内容未詳。

(2) 「五四愛國運動資料」(科學出版社 一九五九)六一三・六一四頁、六四九・六五〇頁の書影ならびに解題、「新民圖書館被控案註銷」(「申報」一九一九・七・二〇)を参照。「所售之章宗祥小史、其中事實完全係載中國過去之政治。与租界毫無關係」と弁護されて免訴とはなつたが、租界における言論弾圧の厳しさにはもつと注意されてよい。

(3) 「山東路商界聯合會通告開會」(「民日日報」一九一九年一〇月二日)「各路商界聯合會消息」(同一〇月二日)「山東路聯合會二次職員會」(同一〇月三〇日)。

(4) 出版預告は一九一九年八月二三日に、発売廣告は二〇年一月五日に、いずれも「申報」に見える。奥付は「民國八年二月初版」となつてゐるが、周劍雲の「弁言」自体が「民國八年十二月二十二日」と署してゐるから、實際の発行は二〇年一月初めであつたらう。

(5) 「解放畫報」一八期に廣告があるが、実物は未見。

(6) 「山東路聯合會職員會」(「民日日報」一九二〇年三月五日)「山東路議決援助學生」(同四月二五日)「馬路聯合會開會彙誌」(同九月三日)を参照。

(7) 前注の各記事ならびに「各路商界底義務學校」(「解放畫報」一三期)参照。

(8) 「工商友誼會開新職員會」(「時報」一九二〇年一月九日)。なお江田憲治著「五四時期の上海勞動運動」(京都大学人文科學研究所共同研究報告「五四運動の研究」第五函 同朋舎 一九九二)を参照。

(9) 周劍雲「答鼎元先生」(「解放畫報」一〇期)。「後來童君与何君等因職權上發生意見、不歡而散、連我的主張也無形打消。你是親眼看見的、

我也別無意見了」と。(一九二二年)四月二四日と自署するから、身を引いたのはこれより以前であつたろう。『民国日報』三月一二日「工商友誼會通告改組」に「工商友誼會因會務未能有良好進步、加之近又少數職員意見不合、遂於昨日召集會議共同議決。結果改組委員會、暫負全責繼續進行。并推定總務董理璋……、一面通告前任職員、即日交替云」とあるのに、おそらく関連する。

(10) 『解放画報』二期(二〇年六月一五日発行)

第三章

(1) 周劍雲「評新舞台的『華奶奶之職業』」(『解放画報』六期)。

(2) 「本報啓事」(同前五期)。

(3) 二期は奥付では一九二二年六月三〇日の発行であるが、『民国日報』での広告の初出は一〇月一四日である。講演の行なわれたのはむしろ夏季休暇後ではなかつたろうか。

(4) 「女子解放与服装的討論・答金菊生」(『解放画報』六期 通信)。

(5) 「告『做人父母的人』和『做人子女的人』」(『解放画報』二期 評論)。同様の趣旨を「文化与人化 答梁鼎礼」(同一一期 通信)ではこう述べている。「我所認為危險的有兩種。一、侈言打破婚姻制度、主張戀愛自由的人。二、侈言脫離家庭關係、自己不能經濟獨立的人。前一種誤認縱慾為快樂、結果是感受無限痛苦。後一種不愛家裏的人、而能愛社会上的人、這種愛是什麼、恐怕他自己也不能自圓其說。一個的經濟制度沒有改善、無論什麼人、無論到什麼地方、無論做什麼事、都不免受經濟壓迫。豈是單單脫離家庭、便能逍遙自在的！這兩種人固然是胸無定見、一味盲從、實在還是那些自命「文化運動家」搖旗吶喊、害了他們呵。

(6) 注(4)に同じ。

(7) 「工人失学的痛苦・答張靜泉」(『解放画報』八期 通信)。

(8) 同前で義務学校の困難な条件について周劍雲は「一、經費不足。二、学生不多。三、教員曠課」をあげている。「担任教員的、本路(山東

路)職員居多。大都純粹義務性質、他們自身有生計上關係、時有欠課

的日子、這層雖不能怪教員、然而学生却厭倦了。我雖承山東路職員推為義務夜校校長、但是無能力使此校發達、非常抱歉。山東路義務夜校就設在山東路聯合會內、地方很小。現在固然学生少、不發達、如果發達、人數增多、就容納不下了。這是第一層困難。我因為曉得國民生計窘困的多、不能使教員全盡義務。因為這種勉強的辦法、於兩方都不利——教員、学生、所以把山東路七位教員——二位國文、二位英文、一位算學、一位國語、一位音樂兼拳術——加以支配、三位在本路的教員全盡義務、四位非本路的教員、每人拿三塊錢一月的車費。辦學堂、當教員、本來是吃苦的事、稍為有点津貼、便有了責任心了」。当事者が述べる義務学校の実態であるので、一資料として紹介しておく。なお簇生した義務学校がいかげんな思いつきで発足した結果、短命に終わるものが多く、事業の信用を落とし、学生にかえって罪作りな結果となっている状況は、裴君健「對於義務学校的商榷」(『解放画報』九期評論)を参照。

(9) たとえば「評新舞台的『華奶奶之職業』」(『解放画報』六期)。「華奶奶之職業」は「新潮」二卷一期のバーナード・ショウ原作 潘家洵訳「華倫夫人之職業」の翻案であるが、ヒロイン華倫薇薇は「情願勞動、自求生活、尊重人格、不慕虛榮、是自幼受過高等教育、得了透徹的見解、才能宗旨堅定、不致墮落」とする。

(10) 「看解放画報者也有五千人」と周劍雲は七期「評『華奶奶之職業』的余波——答汪優游」に書き、「解放画報」八期の広告(『民国日報』一九二二年四月一五日)では「本報銷數逐期增加、再版不易、本期印八千份、庶可普及」としている。

(11) 五カ月の遅れをカットして一九期を民国一一年六月発行として再発足させるということであつたが、一八期の発行自体が六月にずれこんでいた。

(12) わずかに九期(評論)・一〇期(思潮)に寄稿した正厂が「婦女評論」一六期・二九期に、一六期(評論)に寄稿した雲仙が「婦女声」

三期・四期に執筆しているくらいである（『五四時期期刊紹介』第二集「刊物目録」を参照）。

(13) 「告『做人父母的人』和『做人子女的人』」（『解放画報』二期評論）。

(14) たとえば「我覚得在『家族制度』『国家主義』没有廢除以前、要講改革、還是離不了『修身・齊家・治國・平天下』幾句古語。否則勢必無從下手」（『鄉村改革的動機 一 答羅駒重』『解放画報』一五期通信）。湖南湘郷の羅氏進徳会の「遠大処着眼、近小処下手」の観点から改革を図る趣旨に賛同して述べたものだが、この論理は当時のかれの主張を一貫している。

(15) 『解放画報』一三期「評論」に「改良結婚儀式的我見」を載せた沈選千は一六期「通信」に「新社成立宣言」「新社規約」「新醜婚嫁改良会成立宣言」「婚嫁改良会簡約」を寄せた。名を列ねる九人のうち沈選千・黄駕白・呉憎縷ら五人は一七・一八期に評論・小説・詩などを寄稿し、前出の三人は「本報革新予告」の特約撰述員に挙げられている。かれらは浙江新醜縣の小学教師で、発行していた『新醜半月刊』は「吳知事大老爺」から發禁を食ったという（『鄉村改革的動機 二 答沈選千先生』）。張静廬とともに泰東書局にいた沈松泉は四期以降、六回にわたって詩・小説を寄稿し、同じく特約撰述員に加わっているが、かれもおそらく投稿を契機に周の知己をえたのであろう。なお、特約撰述員二九名中、それまでまったく寄稿していない者が五人いる。うち鳳昔醉・唐蒙ら明らかに前二者の範疇に属する者をふくんでいる。

第四章

(1) 「各路義務學校之調査」（『民国日報』一九二二年九月三日）、また「各路商界底義務學校」（『解放画報』一三期 新聞）。

(2) 魏紹昌編『鴛鴦胡蝶派研究資料』（三聯書店 香港 一九八〇）三二六―三二八・四五八頁参照。

(3) 周は第二期掲載の「哀鷓記」（集錦小説）のリレー執筆者の一―番

目に名を出している。

(4) 拙著「救国十人団運動の研究」（前出）一〇六頁参照。

(5) 周剣雲は新舞台の「敬告觀劇諸君」がショウの原作を翻案した理由として挙げた四項を摘録している。その四は「女子生活問題」「社会經濟組織問題」、不但中国一國没有解決、世界除俄国正在改革外、其余各国都還沒有解決。像華倫夫人（遊女屋の経営者）華倫薇薇（その娘、ヒロイン）這樣人、英国、中国何嘗没有！譬如西医治中国人的病、只要对症下药、也能起死回生。那麼与其給看的人、以為英国人、不関痛痒、不如当作中国人、或者能見功效」とあった。当時の演劇界において周剣雲らのような意識がけっして孤立したものでなかったことがうかがえる。ただし、楊應因「戲劇改造的研究（七）」（『解放画報』一三期）によると「華奶奶之職業」は興行的には失敗であったという。

(6) 「久記社之新職員」（『民国日報』一九二二年二月二八日）によれば周剣雲は文牘、任矜蘋は交際、鄭鷓鴣は劇部主任を務めている。

(7) 「愛情短劇 神聖之愛 緣起」（『解放画報』八期 劇本）。

(8) かれが一編も芝居を編んだことがないというのは、おそらく誇張であらう。「申報」一九一九年一月二日の笑舞台（当時鄭正秋ら和平社新劇部が出演していた）の広告に、当夜上演の「孤鴻影」は新民圖書館出版の同名の小説を「劍雲周先生」に請うて戯劇に編んでもらったものと説明がある。

(9) 劍氣凌雲廬という齋名をもったことにも示されているよう。鄭逸梅「著作家之齋名」（注2前出書一四四―一四七頁）を参照。

(10) 朱樸「我對於解放画報的感想和希望」（『解放画報』一期 讀者論壇）に言う、「他（周剣雲）的宗旨、就是把旧社会的惡習慣、一件一件的解放起来、達到真正的「德謨謨克拉」主義為止。創刊号という条件を考えれば、依頼稿であったことはいうまでもなく、これは本人の自己評価と見ても誤りではあるまい。

(11) 丁守和主編「辛亥革命時期期刊紹介」第五集（人民出版社 一九八

七) 二八一—二九二頁「新劇雜誌」参照。

(12) 何秀君「張石川和明星影片公司」(『文化資料叢刊』第一輯)。以下、張石川と明星影片公司に関する記述は、とくに注記せぬかぎり、これによる。なお、谷劍塵「中国電影發達史」(中国教育電影協會編『中国電影年鑑』一九三四)、「張石川」(『中国電影家列伝』一)など諸本は張が投機に失敗した後、残った金で明星公司を始めたとするが、ここでは租界当局から交易所の免許がおりるのを待つあいだに「主意」を変えたという張夫人の証言をとる。

(13) 何秀君の前出の回憶録をはじめ諸本はこの五人を創立者とするが、「明星影片公司十二年経歴史」(『中国電影年鑑』)は張巨川を加えて六人を挙げる。

(14) 一九二一年、中国影戲研究社(顧肯夫等)、上海影戲公司(但杜宇・管際安等)、新亜影片公司が映画を出したが、いずれも短命に終わった(谷劍塵「中国電影發達史」)。但杜宇は画家、管際安は『民国日報』社、いずれも「解放画報」の常連であった。

(15) 前出「明星影片公司十二年経歴史」。かれの結婚がその女性解放論とどうかかわっていたか、詳らかでない。ただ、新婚の夫人が質入して公司の急場に間に合わせるほどの服飾品の持ち主だったことは確かである。

(16) 前出「中国電影發達史」。「陸潔」(『中国電影家列伝』二)によれば、顧肯夫らはアメリカ映画の愛好者「影迷」であつたらしく、「新声」や「春声日報」の影戲欄を担当したのもうなずける。なお、陸潔は本文三四頁に見える陸潔夫と同一人ではなからうか。疑いを存しておく。

(17) 谷劍塵「中国電影發達史」(前出)。

(18) 当初の資本金は公称四万元(五万元とするものもある)、その後公募により二五年に一〇万元、二八年さらに二〇万元に増資した(前出「明星影片公司十二年経歴史」)。

(19) 「鄭鶴鳴君昨日出殯」(『民国日報』一九二五年四月二六日)。

(20) 「鄭正秋の転変」(曹懋唐・伍倫編著『上海影壇話旧』上海文艺出版

社 一九八七)より転引。

(21) 六合影片發行公司の成立については前出何秀君の回憶および「周劍雲」(『中国電影家列伝』一)は一九二八年とし、「阿英」(同前)は『中華影業年鑑』(一九二七年刊 未見)にもとづいて一九二六年とする。

(22) 「洪深」(『中国電影家列伝』二)。かれは帰国後、上海戲劇協社に加入し、一九二四年、「少奶奶的扇子」を演出した。戲劇協社員でもあつた谷劍塵は「孤兒救祖記」の評価の際、「這個電影對於中国国産影片的貢獻、一如話劇中『少奶奶的扇子』。明星公司猶之話劇界中之戲劇協社。……話劇界要是沒有戲劇協社的『少奶奶的扇子』、決不会引起人們的重視。電影界要是沒有明星公司的『孤兒救祖記』、他也不会後來盛極一時、造成了空前的国産電影運動」(前出「中国電影發達史」とひきあいに出している。かれは父親が宋教仁暗殺事件にでなく監督・俳優をも兼ねた。なお、かれは父親が宋教仁暗殺事件に参与したことで、帰国早々父子關係を断絶する声明を新聞に載せたという(田漢)文史資料出版社 一九八五 一一六頁)。洪述祖を父としたことは、包天笑『劊影樓回憶錄統編』(大華出版社 一九七三)一〇四頁、「洪深」(中華文史出版社 一九九一)一七五頁を参照。

(23) 錢杏邨と周劍雲が知合つたのは投稿が契機だったのか、それ以前から明らかなではない。「解放画報」二期に二篇の詩を寄せたのを最初に一六期まで詩一篇、小説四篇、劇本一篇、評論一篇が掲載された。一九二一年二月現在、錢が合肥二中の教師をしていたことは、イブゼンの戯曲を読んで作つた詩「永憶」(九期)の跋に明らかだが、二〇年末、周は父の死によつて帰郷しており、そのさい面晤の機会があつたことはまず確実である。「阿英回憶左聯」(『新文学史料』一九八〇年一期)に「為什麼周劍雲来找我呢?因為我們是同鄉、早就認識。我一九二六年在上海参加党。国共合作期間、被派到国民党黨湖岸党部工作。其時周劍雲在上海辦了一家小電影公司、我同他有關係」とあり、「阿英文集」(三聯書店 香港 一九七六)の「著作目錄」一九二八

年の『兒童書信』に「撰作者自述、此為余一九二二年在安徽六安義務學校教書時所編講義。当年售與新民圖書館迄未印。一九二八年突然印出。此書反映了余五四時期的思想」とある。出版が遅れたのは新民圖書館の業務停止のためであり、数年を隔てて公刊されたのは周劍雲の好意によるものであろう。六合公司の蕪湖あるいは安徽の管轄職務を委嘱したのも同様の動機に出たのではなからうか。

- (24) 「鄭正秋」(『中国電影家列伝』一)より転引。
 (25) 「潘公展」(『中華民國史資料叢稿』人物伝記)二三輯 中華書局 一九八八。
 (26) 『中華民国実業名鑑』(東亜同文会 一九三四年)二二六八頁、明星影片股份有限公司の「重役及幹部」に董事として杜月笙とともに潘公展の名が見える。なお、株の贈与その他については夏衍『懶尋旧夢録』を参照。
 (27) 胡蝶「胡蝶回憶録」(聯経出版公司 一九八六)
 (28) 程李華主編「中国電影發展史」一巻四一六―四二二頁。なお電影界救国会は国民党の弾圧により一ヵ月足らずで活動を停止させられた。
 (29) 「明星公司革新宣言」(『明星半月刊』六巻一期 一九三六年七月六日)、前出「周劍雲」より転引。
 (30) 何秀君前出回憶録。「周劍雲」(前出)、「于伶」「鄭小秋」(『中国電影家列伝』一)をも参照。
 (31) 何秀君前出回憶録によると、張石川も四六六年秋、周の誘いを受け、女優周璇らスタッフ一六、七人を連れて大中華に赴いたが、法院の召喚状が出ていることを知らされて、急遽上海にもどった。
 (32) 「周劍雲」(前出)。
 (33) たとえば経歴も芳しからぬ上に精神をも病んでいた女優周璇に解放後の中共が与えた手厚い配慮については「周璇」(『中国電影家列伝』一)を参照。
 (34) 「胡蝶回憶録」(前出)四二―四三頁。
 (35) 谷劍塵「中国電影發達史」(前出)に見える。

むすび

- (1) 「周劍雲」(前出)。
 (2) 「一封内容複雜的信(統)」(『解放画報』一八期)。
 (3) 谷劍塵「中国電影發達史」(前出)。周劍雲が有力六社を糾合して配給組織・六合公司を作ったのにはおそらくこれに対抗する意味もあつたろう。

(4) 周劍雲「鄭正秋兄」(『明星』半月刊 六巻二期 一九三六年八月一日)、「周劍雲」(前出)より転引。一九三一年、アメリカに洪深を派遣してトーキー撮影機器を導入したさい、そうとうに無駄金を使われた(何秀君前出回憶録)。この件はそれとかわつたものであろう。

付 録 一

- 「解放画報」所載周劍雲文一覽(署名あるもののみ)
 第一期 「本報宣言」、評論「為什麼要東顧」
 第二期 評論「告、做人父母的人、和、做人子女的人」
 第三期 思潮「廢除穿耳」
 第四期 評論「上海婦女的环境問題」、鄭正秋「嫁兩家的可憐女」(劇材)への附識
 第五期 思潮「救国根本方法是什麼」(上海學聯第一義務国民学校義務教育特刊より転載)、朱壹新「婦女解放与生理条件」(思潮)への附誌
 第六期 劉巧鳳「我的婚制解放談——自由恋愛」(思潮)への附識、戲評「評新舞台的『華奶奶之職業』」、万志雲「為什麼不提倡学徒解放?」(読者論壇)への附誌、通信「女子解放与服装的討論・答(金)菊生先生 十一月二十日」
 第七期 朱信庸「和尚道士和尼姑等廢除問題」(評論)への按語、戲評「評『華奶奶之職業』的余波——答汪優遊」、通信「解放与自由・答邵芾棠先生 一九二一・一・三」、「劍雲啓事 一九二

一・一・三

第八期

劇本「愛情新劇『神聖之愛』」(未完)、通信「工人失学的痛苦・答(張) 靜泉先生 一九二二・二・二八」、通信「隱痛・答天津C. T. C 先生 一九二二・二・二八」

第九期

通信「怎樣使旧人物領受新思潮?」答(陳) 子和先生 三月二十日、通信「兩封答復和尚的信・答(朱) 信庸先生三月十九日」

第十期

通信「怎樣能使勞動者受教育?」答(陳) 鼎元先生 四月廿四日

第十一期

劇本「愛情新劇『神聖之愛』」(続完)、通信「文化与人化・答(梁) 鼎礼先生五月二十日」

第十二期

演講錄「婦女問題之将来(在楓涇県立第二高等女子小学)」

第十三期

通信「敬答投函詢問婚事問題的諸君」

第十四期

任矜蘋編「美洲之民」(劇本)への附識、通信「什麼是強大的起重機?」答(汪) 海粟生先生

第十五期

枕新「女士」(評論)への附誌、通信「鄉村改革的動機(一)・答(羅) 軻重先生」

第十六期

通信「鄉村改革的動機(二)・答(沈) 選千先生 一九二二・十・二十四」

第十七期

特載「一封内容複雜的信」、繆程淑儀「新婦女的道德与新道德的婦女」(思潮)への附誌、通信「一個讀者對於美術画的意見・答舒渭文先生」

第十八期

特載「一封内容複雜的信」(続)、通信「工廠女工的環境問題・答汪頌閣先生」、通信「一個讀者贊成美術画的理由・答(朱) 裕璧先生」

付録 二

「解放画報」第十七・十八期目錄

〔五四時期期刊介紹〕第二集六九三—七〇一頁所載「解放画報」目錄にこの兩期を欠くので、とくに付録する。

「解放画報」第十七期

(中華民國一〇年一月三〇日出版 實際は一九二三年四月)

〔特載〕 一封内容複雜的信

什麼叫做孝?——單對婚姻上講

我對於一部分女學生的裝飾底悲觀

結婚和社交

迷信環境

送禮的心理

〔思潮〕 芸術与社会

新婦女的道德与新道德的婦女

女子解放与已解放的女子

〔新聞〕 中華女界聯合會底宣言

童子軍聯合會討論女童子軍

浙江省議會提出「男女同校」案

北京将有廢娼運動

美国大学添設女子国民專科

〔智識〕 物理常識(七)

痛苦?快樂?

老農謠

觀民生女學舞蹈

露 惜

活地獄

〔劇談〕 戲劇改造的研究(十二)

〔小說〕 潜伏的勢力

一世入

二十元

黄婉貞底死

阿珍底病

五千多塊錢

周劍雲

楊立雪

吳憎樓

王警濤

余空我

嚴宗諒

嚴慎予

繆程淑儀

徐奔遠

顧肯夫

枕新

蘋蹤

沈松泉

畢任庸詒

黄駕白

楊塵因

汪英寶

如音

胡雋

沈選千

黄駕白

谷劍塵

〔通信〕 一個讀者對於美術画的意見

舒渭文 劍雲答

〔通信〕 工廠女工的環境問題

一個讀者贊成美術画的理由

汪頌閣 劍雲答
朱裕璧 劍雲答

〔解放画報〕 第十八期

(中華民國一〇年二月三〇日出版 實際は一九三二年六月)

本報革新予告

徵求贊助會員

〔特載〕 一封内容複雜的信(統)

周劍雲

〔評論〕 我底家庭工業談

顧夢西

〔思潮〕 優美民族所具的品質(統)

孫錫麒識

〔新聞〕 女画家鈕霍底演說詞

家庭日新會開展覽會的辦法

陳独秀等勸告蕪湖学生

梧州女生誓願解除二中女禁

広州工業女校之新組織

英国婦女大会討論女子和兒童問題

蘇格蘭底婦女合作社章程

〔智識〕 物理常識(八)

顧肯夫

〔詩〕 新社雜詩

美的世界

春 曉

自然的美

她們的思想

月光下的嘆声

〔劇談〕 戲劇改造的研究(十二)

〔小說〕 母親的教育

声 浪

光明和暗黒

自習室

不孝的学生与師娘

魯垂吾

徐龔邃

陳桂蟾

管際安

梁杏如

楊慶因

畢聿新

沈選千

竺飲冰

朱亮人

黃駕白